

どんどん読める 明日への活力がわいてくる

英語で 元気が出る ちょっと いい話

*Twenty-one
Uplifting Tales
in English*



ちよつといい話製作委員会 編



Foreward

はじめに

「最後まで読み通せる、内容の面白いリーディング用教材」、「ビギナーレベルでも挫折しないような多読用の読み物」—— このような教材をお探しの方は少ないのではないのでしょうか？ そんな方にお薦めなのが、内容が面白く、平易な英文で書かれた本書『英語で元気が出る ちょっといい話』。この本は、初級レベルの方でも最後までスラスラ読めるリーディング用教材、『英語で泣ける ちょっといい話』の姉妹編です。「元気が出る 明日への活力がわいてくる」というテーマを軸にセレクトした物語で、楽しくリーディング学習をしていただけるよう編集されています。

本書に掲載されているのは、英語圏、特にアメリカで長く広く読まれ続けている作者不明の物語。
このような作者不明の物語は、書籍やウェブサイトなど、さまざまな媒体を通じて数多く紹介されています。インターネットの普及以降は、国境を越えた普遍的な魅力を持つ多くの物語が、インド、ベトナム、中国など、英語圏以外の国の人々の間にも広がっています。今回は、多くの人に愛されている物語の中でも、特に前向きなメッセージにあふれる**21**話を厳選して収録しています。

それぞれのストーリーは、より読みやすくするために、アルクの「標準語彙水準**12000**」(「SVL〔Standard Vocabulary List〕**12000**」)に基づき、初中級レベル**1～4**の英単語を中心にリライトしました。見覚えのある英単語と基本的な構文がベースなので、難しく考えることなく、内容を直接理解することができます。

無料でダウンロードできる音声には、すべての物語の英文を収録。リーディング用としてだけでなく、リスニング、音読、リピーティング、シャドーイングなどを通して、「聞く・話す」力を伸ばせる教材としてもご利用いただけます。

収録した物語は、どれもポジティブなメッセージにあふれ、人生が愛おしくなるようなものばかり。分かりやすい英文で書かれた、何度も読みたくなるような物語が満載の本書なら、きっと最後まで読み通せるはず！ 本書を通して、「読み切った達成感」、「英語で内容をダイレクトに理解する喜び」、「多読へのモチベーション」を感じていただけたら幸いです。

※ 「**SVL12000**」とは、日本人英語学習者にとって有用な英単語を、アルクが全**12**段階にレベル分けした語彙リストで、**SVL**は **Standard Vocabulary List** の略となります。
本書の物語で使用されている英単語は、初中級レベルに相当する**LEVEL1～LEVEL4**の**4000**語がメインとなっています。

アルク英語出版編集部 ちょっといい話製作委員会

Contents

目次

はじめに
無料ダウンロード音声について

Chapter 1：ためになる／考えさせられる話

How Rich Are We?：自分たちはどれくらい豊かなんだろう？

The Pencil Story：鉛筆の話

From Here to Here：ここからここへ

Put the Glass Down：グラスを置いて

Keep Your Fork：フォークは持ったままで

The Present：プレゼント

Chapter 2：愛についての話

Memos from Your Child：子どもからのメモ

Installing Love：愛をインストール

Mother's Day：母の日

What Is Love?：愛って何だろう？

Eleanor Roosevelt：エレノア・ルーズベルト

Chapter 3：前向きになる話

What Is Happiness?：幸せとは？

This Is Good：これでいいんだ

Last Respects：最後のお別れ

The Cracked Pot：ひびの入ったかめ

Determination and Persistence：不屈の精神

Chapter 4：人・社会との関わりについての話

Growing Good Corn：おいしいとうもろこしを育てる秘けつ

Thanks for Your Time：君の時間をありがとう

Subway Hero：地下鉄のヒーロー

The Story of Kyle：カイルの話

Grameen Bank：グラミン銀行

無料ダウンロード音声について

本書に対応するMP3音声は、すべて無料でダウンロードしていただけます。

音声ダウンロードの方法

※PC専用のサイトです。

まずはこちらへアクセス！
アルク ダウンロードセンター
<http://www.alc.co.jp/dl/>
(※2014年5月時点の情報。今後詳細が変更になる可能性があります)

- ① 「ダウンロードリスト」の「英語」の中から、「英語で元気が出る ちょっといい話 無料ダウンロード音声」をクリック。
- ② 申し込みフォームに必要事項をご記入の上送信。
- ③ メールで「ダウンロードページURL」の案内が届きます。
- ④ 届いたURLにアクセスして、圧縮ファイルをダウンロードしてください。

ダウンロード音声ファイルについて

圧縮ファイルを解凍ソフトで展開の上、iTunesなどの音声再生ソフトで取りこんでご利用ください。音声再生ソフトでのファイルの取り込み方法や携帯音楽プレーヤーでの利用方法については、ソフトやプレーヤーに付属するマニュアルでご確認ください。

音声ファイルは、音声再生ソフトで次のように表示されます。

出版社名（アーティスト名）：「ALC PRESS INC.」と表示
書名（アルバム名）：『英語で元気が出る ちょっといい話』
ダウンロードした音声のトラック名は
[01_How Rich Are We?：自分たちはどれくらい豊かなんだろう?]
のように表示されます。本書の該当のトラック番号とトラック名を確認して再生し、学習してください。

Chapter 1

ためになる／考えさせられる話

How Rich Are We?

自分たちはどれくらい豊かなんだろう？



真の豊かさ

ある日、お金持ちの父親が、家族を田舎の農場での一泊二日の旅に連れて行った。実は父親にはひそかに、世の中には貧しい人もいることを息子に教えたいという意図があったのだ。旅の後、父親が息子に感想を聞いてみると……。



DL 01_How Rich Are We?

One day, a rich father took his family on a trip into the ²country, with the ³firm intention of showing his son just how poor some people were. They spent a day and a night on the farm of a very poor family. They worked hard with them, ate with them, and in the evening relaxed with them, before falling ³fast asleep, ⁴exhausted from their hard day's work. The next morning they thanked the poor family and ⁵waved goodbye as they drove back to their ⁶luxurious home in the city.

When they finally sat down at home, the father asked his son, "How was the trip?" "Really good, Dad! Everyone was so happy and friendly." "Ah, yes, but did you see how poor they were?" the father asked. "Yeah, I guess." "So, what did you learn?" The son answered, "I saw that we have a pool that reaches to the middle of the garden; they have a river that has no end. We have imported lamps in the garden; they have the stars. Our ⁷patio reaches to the front yard; they have a whole ⁸horizon. And I learned that if there was a problem, everyone joined in to ⁹get it fixed."

When the little boy was finished, his father didn't know what to say. His son added, "Thanks, Dad, for showing me how 'poor' we are!"

226words

The point of this story
Imagine a poor person. Nearly everyone will think of a person lacking money or food. Few, if any, will think of a happy person. However, as the boy in this story ¹⁰highlights, having a greater number of things does not necessarily mean having greater happiness.

ある日、裕福な父親が、世の中にはいかに貧しい暮らしをしている人もいるか息子に教えようという固い意志のもと、家族を田舎へ旅行に連れて行きました。彼らは大変貧しい家族の農場で一昼夜を過ごしました。農場の一家と一緒にせっせと働き、食事をし、夜には共にくつろぎ、それから日中の重労働でへとへとに疲れてぐっすり眠ったのでした。翌朝、彼らはその貧しい家族にお礼を言い、手を振ってさようならを告げ、都会の豪華な家に車で帰って行きました。

ようやく家に着いて腰を下ろすと、父親は息子に尋ねました。「旅行はどうだった？」すると息子は、「すごく良かったよ、パパ！ みんなとても幸せそうだったし、優しくかった」「ああ、そうだね、でも彼らがどんなに貧しいか分かったかい？」と父が尋ねると、息子は、「うん、たぶん」と答えました。「で、何を学んだ？」息子はこう答えました。「うちには庭の真ん中くらいまでのプールがあるけど、あの人たちにはどこまでも続く川がある。うちの庭には輸入もののランプがあるけど、あっちには星がある。うちのパティオは前庭の所までしかないけど、彼らには地平線全部がある。それに、もし問題があつたら、みんなが集まってそれを解決するんだってことが分かったよ」

幼い息子が話し終えた時、父親は何と言ってよいかわかりませんでした。そして息子はさらにこう言いました。「パパ、僕たちがどれだけ『貧しいか』教えてくれて、ありがとう！」

このストーリーのポイント
貧しい人を想像してみてください。ほとんど誰もがお金や食べ物を持っていない人のことを想像するでしょう。幸せな人を思い描く人はほとんどいないでしょう。しかし、この話の少年が浮き彫りにしているように、より多くの物を持っていることが必ずしもより幸せであるという意味ではないのです。

- *1 country：田舎
- *2 firm intention：固い意志
- *3 fast asleep：ぐっすり眠っている
- *4 exhausted：へとへとになって、非常に疲れて
- *5 wave goodbye：手を振ってさようならを言う
- *6 luxurious：豪華な、ぜいたくな
- *7 patio：パティオ、テラス
- *8 horizon：地平線
- *9 get ... fixed：...を解決する
- *10 highlight：...を強調する、目立たせる

The Pencil Story

鉛筆の話



教訓

ある鉛筆作りの職人が、出来上がったばかりの鉛筆に、5つの大切なことを伝えた。鉛筆はその内容をしっかりと心に刻み、納品箱に入った。その教えは普遍的なもので……。



DL 02_The Pencil Story

The pencil maker took a new pencil aside, just before putting him into the box. “There are five things you need to know,” he told the pencil, “before I send you out into the world. Always remember them, and you will become the best pencil you can be.”

“One: you will be able to do many great things, but only if you think of the whole picture.”

“Two: from time to time your point will become blunt and you will not be able to perform as well as you'd like to, but don't let this problem stop you from trying.”

“Three: you will make mistakes.”

“Four: the most important part of you will always be what's inside.”

“And five: in every place you are used, you must leave your mark. No matter what your condition, you must continue to write.”

The pencil understood and promised to remember, and went into the box with purpose in its heart.

Now put yourself in the pencil's place. Always remember these things and you will become the best person you can be.

One: you will be able to do many great things, but only if you think of the whole picture. It's very easy to forget the important things in life by concentrating on your own little world. You must always remember to work for the good of everyone and not just for the good of yourself.

Two: from time to time you may feel there is no point in your life, when everything you try fails, but disappointments should make you value the things you have and help you better understand the problems of others.

Three: you will make mistakes — everybody does. The important thing is to do your best to learn from them, so as not to repeat those mistakes in the future.

Four: the most important part of you will always be what's on the inside. If you look beautiful on the outside, that may get you noticed, but unless you are beautiful on the inside, people will not return to you and you will lead a lonely life.

And, five: in every place you go, you must leave your mark. No matter what the situation, you must continue to do your duty.

Allow this story of the pencil to encourage you. Yes, life can be painful and we all make mistakes, but you can live a satisfying and useful life if you think of others as well as yourself.

409words

The point of this story

It is easy to believe that life is complicated, but there are a few simple things we should not forget. Just like a pencil, we have the ability to be productive, but we must also remember to think of the bigger picture.

鉛筆作りの職人は箱に入れる直前にその鉛筆を脇に連れ出しました。「君に知っておいてほしいことが5つある」と彼は鉛筆に言いました。「君を世界に送り出す前にね。それをいつでも覚えていてほしい。そうすれば君は可能な限り最高の鉛筆になれるから」

「第一に、君は素晴らしいことをたくさんできるだろう、ただし全体像を考えたときだけにね」

「第二に、時には先端が鈍って思うような成果が出せないかもしれないが、だからといって挑戦するのをやめないように」

「第三に、君は間違うこともあるだろう」

「第四に、君の一番大事な部分はいつでも自分の中にあるものなのだ」

「そして第五に、君が使われるどの場所でも、君は足跡を残さなきゃいけない。自分の状態がどうあれ、書き続けなきゃいけないんだ」

その鉛筆は言われたことを理解し、それらを覚えていることを約束しました。そして決意を胸に、箱に入って行きました。

さて、自分自身をこの鉛筆の立場に置き換えてみてください。これらのことをいつも覚えていれば、あなたはきっと可能な限り最高の人間になることができるでしょう。

第一に、あなたは多くの素晴らしいことを成し遂げられるでしょう、ただし全体のことを考えていれば。自分の狭い世界に集中すると、人生において重要なことをとても簡単に忘れます。自分のためだけでなく、みんなのために働くことを忘れてはいけません。

第二に、時には、何をやってみてもうまくいかず、自分の人生には意味がないと感じるかもしれません。しかし、失望を経験することで、自分が持っているものを大切に、ほかの人が抱えている問題をより理解できるようになるのです。

第三に、あなたは間違うこともあるでしょう —— 誰もあるのです。重要なのは、今後同じ間違いを繰り返さないよう、その間違いから学ぼうと全力を尽くすことです。

第四に、あなたの最も大事な部分はいつでもあなたの中にあるものなのです。もし外見が美しくて注目されたとしても、中身が美しくなければ、人々は去り、あなたは寂しい人生を歩むでしょう。

そして第五に、あなたはどこへ行っても、自分の足跡を残さなくてはなりません。状況がどうであれ、あなたは自分の責務を果たし続けなくてはならないのです。

この鉛筆の話で、自分自身を勇気づけてください。もちろん、人生にはつらいこともあり、われわれは皆間違いを犯すこともありますが、自分だけでなく周りの人のことも考えることで、満足のいく、有益な人生を送ることができるでしょう。

このストーリーのポイント

人生は複雑だと思うのは簡単ですが、忘れてはいけないシンプルなことがいくつかあります。鉛筆のように、われわれ人間には物を生み出す能力があるのです。ただ同時に、より広い視野で考えることも忘れないようにしなくてはなりません。

- *1 take ... aside：...を脇に連れ出す
- *2 only if ...：...の場合に限り
- *3 whole picture：全体像
- *4 from time to time：時々
- *5 point：先端、先
- *6 blunt：鈍い
- *7 perform：成し遂げる
- *8 stop ~ from ...ing：～が...するのを妨げる
- *9 mark：跡、印
- *10 purpose：決意、決心
- *11 in one's place：...の立場に
- *12 concentrate on ...：...に集中する
- *13 for the good of ...：...のために
- *14 disappointment：失望、落胆
- *15 value：...を評価する、大事にする
- *16 so as not to ...：...しないように
- *17 duty：義務、責務、本分
- *18 encourage：...を勇気づける、励ます
- *19 complicated：複雑な
- *20 productive：生産的な、生産力のある
- *21 think of the bigger picture：大局的に考える、広い視野で考える

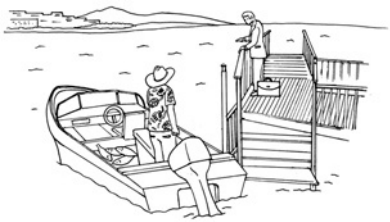
From Here to Here

ここからここへ



真の豊かさ

あるアメリカ人ビジネスマンが、メキシコの海岸沿いの村で一人の漁師と出会った。魚を数匹しか釣らず、のんびりと暮らしている漁師にアメリカ人は、より豊かに生きるための方法をアドバイスするが.....。



DL 03_From Here to Here

An American businessman was by the sea in a little Mexican village when a small boat with just one fisherman arrived. Inside the small boat were several large fish. The American told the Mexican how good the fish looked and asked how long it had taken to catch them. The Mexican replied that it had only taken a short while. The American then asked why he didn't stay out longer and catch more fish. The Mexican said that he had caught enough for himself and his family. The American then asked, "But what do you do with the rest of your time?" The fisherman said, "I sleep late, fish a little, play with my children, take a siesta with my wife, Maria, and wander into the village each evening, where I drink wine and play guitar with my friends. I have a full and busy life, sir." The American laughed. "I'm a Harvard MBA and I could help you," he said. "You should spend more time fishing and with the extra money you make, buy a bigger boat. With the extra money earned fishing from the bigger boat, you could buy several boats and one day you could have 10, 15, maybe 20 fishing boats! Instead of selling your catch at the local market, you could sell directly to the fish factories. But why stop there? You could open your own cannery. You would control the product, processing and distribution. You would need to leave this little village and move to Mexico City, then probably LA and onto New York City, where you could run your great fishing business."

The fisherman asked, "But sir, how long will all this take?" The American replied, "Fifteen years." "But then what, sir?" The American laughed and said, "That's the best part. When the time is right, you would sell your company stock to the public and become very rich. You would make millions!" "Millions, sir? Then what?" The American said, "Then you could retire. Move to a little fishing village where you could sleep late, fish a little, play with your ... OK, your kids will have grown up, but you could still take a siesta with your wife, and wander into the village in the evenings, where you could drink wine and play guitar with your friends. Doesn't that sound like the perfect life?"

391words

The point of this story
This story encourages us to think about our goals in life. Many people jump into a career without considering what they really hope to achieve. The goal of earning more and more is not a worthwhile goal in itself. It is easy to overlook the pleasure that the simple things in life can bring.

メキシコの小さな村の海岸にアメリカ人ビジネスマンがたたずんでいたところ、たった一人の漁師を乗せた小さな船が岸に着きました。その小舟の中には大きな魚が数匹いました。アメリカ人はそのメキシコ人に、その魚はとても見事だと伝え、釣るのにどれくらいの時間がかかったか尋ねました。メキシコ人漁師はほんのわずかな時間しかかからなかったと答えました。するとアメリカ人は、なぜもっと長く海にいてより多くの魚を釣らないのか聞きました。メキシコ人は、自分たち家族のために十分な数の魚をもう釣ったので、と言いました。するとアメリカ人は、「でも、余った時間をどう過ごしているんだい？」と尋ねました。漁師は、「朝はのんびり起きて、少し釣りをし、子どもたちと遊び、妻のマリアと昼寝をし、それから毎晩村までふらっと歩いて行ってそこで友人とワインを飲んでギターを弾くんです。充実した忙しい人生を送っていますよ」と言いました。そのアメリカ人は笑って、「私はハーバードのMBAを持っているから、君を助けてあげられると思うよ」と言いました。「漁の時間を増やして、余分に稼いだお金でもっと大きな船を買うんだ。その大きな船で漁をしてできた余分なお金で数隻の船を買えば、いつかは10、15、あるいは20隻の漁船が持てるかもしれない！それで釣った魚を地元の市場に売る代わりに直接魚工場に売ればいい。でもそこで終わりじゃない。自分の缶詰工場を開くのさ。製品と加工と流通を自分で管理するんだ。この小さな村を出てメキシコ市に移る必要があるだろうが。それからロサンゼルス辺りに行って、その後ニューヨークに行って、そこで巨大な漁業ビジネスが築けるさ」

漁師は尋ねました。「でも、それがすべて実現するのにどのくらいの年月がかかるんですか？」「15年だね」とアメリカ人は答えました。「でもその後何があるのですか？」アメリカ人は笑って言いました。「そこからが一番良いところさ。時期が来たら、その会社の株を一般に販売して富を手に入れるんだ。何百万ドルも入るかもしれないぞ！」「何百万ドルもですか？で、その後は？」アメリカ人は言いました。「引退すればいい。小さな漁村にでも引越して、朝はゆっくり寝て、少し釣りでもして、子どもと遊んで.....そうか、君の子どもはとっ

くに大きくなっているだろうが、奥さんと昼寝することはできるだろう、そして夜は村までふらりと歩いて行ってそこで友人とワインを飲んだりギターを弾いたりできるさ。どうだい、完ぺきな人生じゃないか？」

このストーリーのポイント
この話は人生の目標について考えさせてくれます。多くの人は、自分が本当に達成したいことは何か考えずに仕事の世界に飛び込みます。できるだけ多くのお金を稼ぐという目標は、それ自体価値のある目標ではありません。私たちは、人生における素朴な事柄がもたらしてくれる喜びを見逃しがちなのです。

- *1 while：少しの時間
- *2 sleep late：朝寝坊する、遅くまで寝ている
- *3 siesta：（スペイン語で）昼寝、シエスタ
- *4 wander into ...：...までぶらぶら歩く、散歩する
- *5 full：（生活などが）充実した
- *6 MBA：経営学修士号（=Master of Business Administrationの略）
- *7 catch：（名詞で）漁獲量、釣果
- *8 cannery：缶詰工場
- *9 processing：処理、加工
- *10 distribution：流通
- *11 run：...を経営する、運営する
- *12 stock：株
- *13 encourage：（...するように）促す
- *14 achieve：得る、成し遂げる
- *15 worthwhile：価値のある、やりがいのある
- *16 overlook：...を見逃す、見落とす

Put the Glass Down

グラスを置いて



休息の大切さ

ある教師がグラスを持ち上げ、「この水の入ったコップはどれくらいの重さ？」と聞くところからストーリーは始まる。講義の主題は、ストレスへの対処法。このコップとストレスの関係性は？どんなアドバイスが繰り出されるのだろうか？



DL 04_Put the Glass Down

A teacher was talking to her students about stress management. She raised a glass of water and asked them, “How heavy do you think this glass of water is?”

The students' answers ①ranged from 20 to 500 grams.

②As a matter of fact, how heavy it is doesn't depend on how much the water actually ③weighs. It depends on how long you hold it.”

“If I hold it for a minute, it's OK. If I hold it for an hour, my arm will start to hurt. If I hold it for a day, you may have to call an ④ambulance! It is the exact same weight, but the longer I hold it, the heavier it becomes.”

“⑤The same goes for our ⑥burdens. If we carry them around with us all the time they will start to ⑦weigh us down. ⑧Sooner or later we will not be able to ⑨carry on.”

“What you have to do is to put the glass down and rest for a while, before lifting it up again.”

We have to put down our burdens from time to time, so that we can get our energy back and carry on. So be sure to make time for yourself each day to put all of your cares and troubles aside and just relax.

You can always pick them up later. Whatever burdens are weighing you down, forget about them for a moment if you can.

Pick them up again when you've rested. Life is short; enjoy it!

249words

The point of this story

Awel-known proverb summarizes this story perfectly: “①All work and no play makes Jack a dull boy.” If we don't put down our burdens from time to time, we, and our lives, will become dull. To ②revitalize ourselves and our lives, we need to rest, to take time off and to relax.

ある教師がストレス管理について生徒に話していました。彼女は水の入ったグラスを持ち上げて尋ねました。「このグラスの水はどれくらいの重さだと思いますか？」

生徒の答えは20グラムから500グラムまでさまざまでした。

「実は、この重さは水の実際の重量とは関係ありません。それをどれだけ長い間持っているかによって決まるのです」

「もし1分持っているだけなら、大丈夫でしょう。でももし1時間持っていたら、腕が痛くなってくるでしょう。もし1日持ち続けていたら、救急車を呼ばなければならいかもしれません！ 全く同じ重さでも、持っている時間が長くなればなるほど重くなるのです」

「私たちの抱える重荷についても同じことが言えます。もしずっと背負い続けていたら、その重さで打ちひしがれてしまうでしょう。遅かれ早かれ、もう進むことができなくなるでしょう」

「皆さんがやるべきことは、グラスを置いて少しの間休み、また持ち上げることなのです」

活力を取り戻し、歩き続けることができるよう、われわれは時々荷を下ろさなくてははいけません。ですから、毎日、心配事や悩みを脇に置いて肩の力を抜く時間を必ず作るようにしましょう。

荷物をまた背負うことはいつでもできるのです。あなたを減入らせている重荷があるのなら、できれば少しの間それらを忘れるようにしてください。

休んだらまた持ち上げてください。人生は短いのです。楽しみましょう！

このストーリーのポイント

有名なことわざがこの話を端的に表しています。「よく学び、よく遊べ」。時々荷を下ろさなければ、自分という人間や人生はつまらないものになるでしょう。自分自身や人生の活力を回復するためには、休息を取ったり、仕事から離れてみたり、くつろいだりする時間が必要なのです。

- *1 range from A to B : AからBに及ぶ、幅がある
- *2 as a matter of fact : 実際のところ、実は
- *3 weigh : ...の重さがある
- *4 ambulance : 救急車
- *5 the same goes for ... : ...は同様、...もしかり
- *6 burden : 責任、負担、重荷
- *7 weigh ... down : ...の気を重くさせる、...の重荷になる
- *8 sooner or later : 遅かれ早かれ
- *9 carry on : 進む、続ける
- *10 All work and no play makes Jack a dull boy. : 勉強ばかりで遊ばないと子どもは駄目になる（よく学びよく遊べ）。
- *11 revitalize : ...に新しい活力を与える

Keep Your Fork

フォークは持ったままで



余命あとわずかのある若い女性が、自分の葬式で身に着けたい服装、読んでもらいたい聖書の一節などを牧師に伝えている。そして、女性からの最後の願いは、思いもよらないものであると同時に、非常に胸を打たれるものだった……。女性の願いとは？



DL 05_Keep Your Fork

There was a young religious woman who had been told she was dying and had been given three months to live. So as she was getting her things “in order,” she contacted her priest and asked him to come to her house to discuss certain details of her final wishes.

She told him which songs she wanted to be sung at her funeral service, what Bible stories she would like to be read out, and what clothes she wanted to be buried in.

Everything was almost in order, and the priest was preparing to leave when the young woman made her final and most important request.

“There's one more thing,” she said calmly.

“What's that?” came the priest's reply.

“This is very important,” the young woman continued. “I want to be buried with a fork in my right hand.”

The priest stood looking at the young woman, not knowing quite what to say.

“I suppose that surprises you, doesn't it,” the young woman said.

“Well, to be honest, I am puzzled by the request,” said the priest.

The young woman explained. “My grandmother once told me a story, and from that time I have always believed in its message. I have also always tried to pass that message on to those I love and those who are finding life hard.”

“My grandmother told me this: ‘In all my years of attending socials and dinners, I always remember that when the dishes of the main course were being cleared, someone would lean over and say, “Keep your fork.” It was my favorite part, because I knew that something better was coming — like velvety chocolate cake or deep-dish apple pie. Something wonderful, and worth waiting for!’ ”

“So, I just want people to see me lying there in that coffin with a fork in my hand, and I want them to wonder, ‘What's with the fork?’ Then I want you to tell them: ‘Keep your fork ... The best is yet to come.’ ”

The priest's eyes filled with tears as he said goodbye to the young woman. He knew this would be one of the last times he would see her before her death. But he also knew that the young woman had a stronger belief in heaven than he did. She had a stronger belief in what heaven would be like than many people twice her age with twice as much experience and knowledge. She truly believed that something better was coming.

At the funeral, people were walking by the young woman's coffin and they saw the clothes she had chosen and the fork in her right hand. Over and over, the priest heard the question: “What's with the fork?” And over and over he smiled.

During his message, the priest told the people of the conversation he had had with the young woman before she died. He also told them about the fork and about what it meant to her. The priest told the people how he could not stop thinking about the fork and told them that they probably would not be able to stop thinking about it either.

So the next time you reach down for your fork, let it remind you, ever so gently, that the best may be yet to come.

543words

The point of this story
Everyone has worries and disappointments at times. There are times in life when things get us down, when all the good times can seem to be in the past. This story reminds us not to give up hope, because often the future may hold even better times.

余命3カ月を宣告された、若くて信心深い女性がいました。身の回りを「整理」するにあたり、彼女は牧師に連絡を取り、遺言の詳細を話し合うため家に来てほしいと頼みました。

彼女は牧師に、自分の葬式でどの歌を歌ってほしいか、聖書のどの物語を読んでほしいか、どんな服装で埋葬してほしいかといったことを伝えました。

すべての手配がほぼ整い牧師が帰る準備をしていた時、若い女性は最後の、そして最も大切な依頼をしました。

「もう一つあるのですが」と彼女は静かに言いました。

「何ですか？」と牧師は返答しました。

「とても重要なことなのです」とその若い女性は続けました。「埋葬される時、右手にフォークを持っていたいのです」

牧師は何と言ったら良いか全く分からずに女性を見つめて立っていました。

「驚かせてしまいましたよね」と女性は言いました。

「あの、正直なところ、そのご依頼に戸惑っています」と牧師は言いました。

その若い女性は説明しました。「私の祖母が昔、ある話を聞かせてくれて、それ以来ずっと私はそのメッセージを信じてきました。それに、自分の愛する人たちや人生に悩んでいる人たちにもそのメッセージを伝えようとしてきました」

「祖母はこんな話をしてくれたんです。『これまでの人生でパーティーやディナーに出席した際、メインコースのお皿が下げられている時に誰かが身を乗り出して、『フォークは持ったままで』と言っていたのをよく思い出します。それは私の大好きな瞬間でした。なぜなら何かさらにおいしいものが来ることが分かっていたから——滑らかなチョコレートケーキや深皿焼きのアップルパイのような。素晴らしくて待つ価値のある何かが！』」

「ですから、みんなには私が手にフォークを持って棺に横たわっている姿を見て、『なぜフォークを持っているの？』と思ってほしいのです。そしてあなたから伝えてほしいのです。『フォークは持ったままで……一番のお楽しみはこれから来るのだから』と」

その若い女性に別れを告げる時、牧師の目は涙であふれていました。彼女が亡くなる前に会う機会はこれが最後になるかもしれないと知っていたからです。と同時に、この女性が天国の存在を自分以上に強く信じているのだということも分かっていました。彼女は、自分の倍もの歳で経験も知識も倍ある多くの人たちよりも、天国がどんなものであるかについて強い信念を持っていました。これからもっとすてきなことがやってくると本当に信じていたのです。

葬式で人々はその若い女性の棺の横を歩き、彼女が事前に選んだ服や、右手に持ったフォークを目にしました。「あのフォークは何？」という質問を牧師は何度も耳にしました。そして彼は何度もほほ笑みました。

牧師は説教の中で、女性が亡くなる前に交わした会話のことを参列者に話しました。彼はフォークとそれが彼女にとってどんな意味を持っているかについても伝えました。牧師は人々に、そのフォークのことがいかに頭から離れなかったか、そしてまた、聞いている人々もおそらくこれから頭から離れないだろうと話しました。

今度フォークに手を伸ばす時、一番良い瞬間はこれから来るかもしれないということをそっと思い出してください。

このストーリーのポイント

誰しも心配事や失望することがあります。人生には、いろいろなことで意気消沈し、良い時期はもうすべて過ぎ去ってしまったように感じられる時があります。この話は私たちに、未来にはさらに良い時期がたびたびあるかもしれないから望みを捨ててはいけないということを思い出させてくれます。

- *1 religious：信心深い、敬けんな
- *2 have ~ month(s) to live：余命が～カ月である
- *3 in order：整って、整理されて
- *4 priest：牧師
- *5 final wishes：遺言
- *6 funeral service：葬式、葬儀
- *7 bury：...を埋葬する
- *8 puzzle：...を困惑させる
- *9 pass：...を手渡す、伝える
- *10 social：親睦会、パーティー
- *11 clear：...を片付ける
- *12 lean over：身を乗り出す
- *13 velvety：滑らかな、口当たりの良い
- *14 deep-dish：深皿で焼いた
- *15 coffin：棺
- *16 yet to come：まだ来ていない、これから来る
- *17 belief：信仰
- *18 over and over：繰り返し
- *19 message：説教
- *20 ever so：とても
- *21 get ... down：...を落ち込ませる、がっかりさせる

The Present

プレゼント



時間の大切さ

私たちは毎朝、「銀行」からあるものを引き出している……、という語りかけから始まるこのストーリー。全ての人が持っているこの口座は、実はためることができません。私たちはいったい何を引き出して使っているのでしょうか。



DL 06_The Present

Imagine there was a bank that each morning ① credited your account with ② a large sum of money. But, it carried over no ③ balance from day to day. Every evening it removed whatever part of the balance you failed to use during the day. What would you do? Draw it all out, of course!

Each of us does have such a bank. Its name is Time. Every morning, it credits you with 86,400 seconds. Every night it ④ writes off as ⑤ lost whatever of this you have failed to use ⑥ to good purpose. It ⑦ carries over no balance. It allows no ⑧ overdraft. Each day it gives you 86,400 shiny new seconds to use ⑨ as you please. Each night it burns the ⑩ remains of the day. If you fail to use the seconds, minutes and hours of the day, the loss is yours. There is no going back. There is no ⑪ drawing against tomorrow. You must live in the ⑫ present on today's hours. ⑬ Invest them wisely so as to get the best in health, happiness, and success!

The clock is running. ⑭ Make the most of today. And remember that time waits for no one. As ⑮ Eleanor Roosevelt wrote, "Yesterday is history. Tomorrow is mystery. Today is a gift. That's why it's called the present."

211words

The point of this story
Time is ⑯ precious. Everyone has wasted time in the past, but the good thing is that as you read this you have more time. So don't waste it! Right now, you can start ⑰ afresh and use your time exactly as you choose.

毎朝あなたの口座に大金を振り込んでくれる銀行を想像してみてください。ただし残高は翌日には繰り越されません。毎晩、その日に使い損ねた残金はすべて消えます。あなたならどうしますか？ もちろん、すべて引き出しますよね！

実際、私たちの誰もがそのような銀行を持っています。その名前は「時間」です。毎朝8万6400秒を貸し付けてくれます。そして毎晩、十分効果的に使うことができなかった部分はすべて損失として帳簿から消されます。残高は持ち越されません。限度を超えて借り越すこともできません。毎日、あなたが好きなように使える8万6400秒というピカピカの新しい時間をくれるのです。そして毎晩、その日の残りを燃やし尽くします。もしその日の秒、分、時間を使い損ねてしまったら、それはあなたの損失になります。取り返すことはできません。「明日」の分を先に引き出すこともできません。今日の時間を使って現在を生きなくてはいけないのです。最高の健康、幸福、そして成功を手に入れるために、その時間を賢く投資してください！

時計は回っています。今日という日を最大限に活用してください。そして、時は誰も待つてはくれないということを忘れないでください。エレノア・ルーズベルトがこう書いていました。「昨日はヒストリー（歴史）。明日はミステリー（謎）。でも今日はギフト（贈り物）です。だからそれをプレゼント（現在）と呼ぶのです」

このストーリーのポイント
時間はかけがえのない物です。誰も過去に時間を無駄にしたことがあるでしょうが、一つ朗報は、この話を読んでいる今、この先にもっと時間があるということです。ですから、これからの時間を無駄にしないでください！ この瞬間、新たにスタートし、自分が選んだ通りの方法で時間を使うことができるのです。

- *1 credit A with B : AにBを信用貸しする
- *2 a large sum of money : 大金
- *3 balance : 残高、差額
- *4 write off : (回収不能とみなし) 帳簿から消す、差し引く
- *5 lost : 遺失した
- *6 to good purpose : 十分効果的に
- *7 carry over ... : ...を持ち越す、繰り越す
- *8 overdraft : 当座貸越(借越)、過度の引き出し
- *9 as you please : 好きなように
- *10 remain : 残り
- *11 draw ~ against ... : ...から～を引き出す
- *12 present : 現在
- *13 invest : 投資する
- *14 make the most of ... : ...を最大限に活用する
- *15 Eleanor Roosevelt : エレノア・ルーズベルト。アメリカ合衆国第32代大統領フランクリン・ルーズベルトの夫人
- *16 precious : 貴重な
- *17 afresh : 新たに、もう一度

Chapter 2

愛についての話

Memos from Your Child

子どもからのメモ



親子愛

ここで紹介するのは、子どもから親へのお願い。クスッと笑えるもの、考えさせられるもの、そしてほろりとさせられるもの……。子どもたちは親に対してどんな思いを抱いているのだろうか？



DL 07_Memos from Your Child

Don't be too upset if I say, "I hate you." I don't really hate you; I'm just sad because you don't understand me.
Don't ²³correct me in front of people if you can ²⁴help it. I'll ²⁵take much more notice if you talk to me ²⁶in private.
Don't complain all the time. If you do, I shall soon stop listening.
Don't ²⁸question my ²⁹truthfulness too much. I am easily frightened into telling lies.
Don't tell me my fears are silly. They are terribly real to me, and you can help me understand them.

Don't ³²spoil me. I know I can't have everything I ask for ... I'm only testing you.
Don't be afraid to ³³be firm with me. I prefer it ... it ³⁴teaches me right from wrong.
Don't make me feel that my mistakes are crimes. You should judge me on my ³⁸intentions, not my ³⁹failures.
Don't try to protect me from everything. Sometimes I need to learn ⁴²the hard way.
Don't forget I love ⁴³experimenting. It's the best way for me to learn, so please put up with it.

Don't make promises you can't keep. It will make me lose trust in you.
Don't say no one day, but yes the next. That completely puzzles me and makes me ⁴⁶lose faith in you.
Don't ⁴⁸put me off when I ask you questions. If you do, you'll find that I stop asking you and start looking elsewhere for advice.
Don't ever suggest that you are perfect. It will give me ⁵¹too great a shock when I discover that you're not.
Don't forget that I cannot explain myself as well as I would like. That is why I'm not always ⁵²accurate.

Don't think you should never say sorry to me. Saying sorry shows me I am important, and brings me closer to you.
Don't forget how quickly I am growing up. I know it must be very difficult for you to keep pace with me, but please try.
Don't forget that I can't grow without lots of love. The more I receive, the more I'll be able to give.

And please keep yourself ⁵⁵fit and healthy. I need you.

357words

The point of this story
Many children hear adults telling them, "Don't do this," and "Don't do that." It's worth remembering that if the roles were ⁵⁸reversed our children would also like to tell us not to do a great number of things. So, just as we expect them to do everything we say, we must consider whether our own behavior reaches the high standards we ⁵⁹demand of our children.

もし僕が「お母さん／お父さん大嫌い」と言ってもあまり怒らないで。本当に嫌いなわけじゃないんだ。分かってもらえなくて悲しいだけ。
できれば人前でしからないで。こっそり言ってくれればもっと気を付けるよ。
いつも文句ばかり言わないで。そうされるとすぐに耳をふさいでしまうから。
僕の正直さをあまり疑わないで。すぐに怖くなってうそをついてしまうから。
僕の恐怖心を馬鹿げていると言わないで。僕はものすごくまじめに悩んでいるんだから、その原因を理解する手伝いをしてほしい。

僕を甘やかさないで。頼めば何でも手に入るなんて思っていない……。ただお母さん／お父さんを試しているだけ。
僕に毅然とした態度を取るのを恐れないで。僕はそうしてくれた方がいい……。善悪の判断ができるようになるから。
僕の間違いが犯罪であるかのように思わせないで。失敗じゃなく、僕の意図を見て判断してほしい。
すべてから僕を守ろうとしないで。ときには苦い経験から学ぶことも必要だから。
僕はいろいろ試すのが大好きだということを忘れないで。僕にとってはそれが一番よく学べる方法だから、悪いけど我慢して。

守れない約束はしないで。お母さん／お父さんのことを信用できなくなるから。
日によって言うことを変えないで。本当に混乱するし、お母さん／お父さんへの信頼がなくなってしまうから。
僕が質問するとき、はぐらかさないで。ちゃんと取り合ってくれないなら、お母さん／お父さんに聞くのをやめて、どこかほかにアドバイスを求めるようになるか

ら。

自分が完べきであるふりをしないで。そうじゃないと分かったとき、ショックが大きすぎるから。

僕は自分のことを思ったように説明できないということを忘れないで。だから時々間違っていることを言うんだ。

親は子どもに謝るべきじゃないなんて思わないで。謝ってくれることで、自分が大切な存在だってことが分かって、より強いきずなを感じられるようになるから。

僕の成長の早さを忘れないで。僕のペースについてくるのは大変かもしれないけれど、どうか合わせるようにして。

僕はたくさんの愛がないと育たないってことを忘れないで。たくさんの愛をもらえばもらうほど、もっと与えられるようになるんだ。

そして、体調に気をつけて健康でいて。僕にはお母さん／お父さんが必要だから。

このストーリーのポイント

多くの子どもは親に、「これをやっちゃだめ」「あれをやっちゃだめ」と言われます。もし立場が逆転したら、子どもたちもわれわれにやらないよう言いたいことが山ほどあるということを覚えておくの良いでしょう。

ですから、彼らに何でも言うことを聞くように期待するならば、われわれ自身の行動も子どもへの要求と同じくらい高い基準に達しているか考えなくてははいけません。

- *1 correct：...をしかる、罰する
- *2 help：避ける、抑える
- *3 take notice：注意する、気付く、関心を持つ
- *4 in private：こっそりと、人目がない時に
- *5 question：...を疑う、（...について）問いただす
- *6 truthfulness：誠実、正直
- *7 spoil：...を甘やかす
- *8 be firm with ...：...に毅然とした態度を取る
- *9 teach ... right from wrong：...に善悪の区別を教える
- *10 intention：意図
- *11 failure：失敗
- *12 the hard way：（副詞的に）苦勞して、苦い経験から
- *13 experiment：実験する
- *14 lose faith in ...：...を信用できなくなる
- *15 put ... off：...の気をくじく、ひるませる、はぐらかす
- *16 too great a shock：あまりにも大きなショック
- *17 accurate：間違いのない、正確な
- *18 fit：体の調子が良い
- *19 reverse：...を逆転する、入れ替える
- *20 demand ~ of ...：～を...に要求する

Installing Love

愛をインストール



自己と他者への愛

ある顧客が、技術サポートセンターに電話をした。「愛」のインストール方法について質問したかったようだ。「愛」をいかにインストールすればよいのか、サポート担当のアドバイスが始まる。



DL 08_Installing Love

Tech Support: Yes ... how can I help you?

Customer: Well, my system doesn't seem to be running properly, so after much thought, I decided to install Love. Can you guide me through the installation process?

Tech Support: Yes. I can. Are you ready to start?

Customer: Well, I'm not very technical, but I think I'm ready. What do I do first?

Tech Support: The first step is to open your heart. Have you found your heart?

Customer: Yes, but there are several other programs running now. Is it OK to add Love while they are still running?

Tech Support: What programs are they?

Customer: Let's see, I have past-hurt.exe, low-self-esteem.exe, jealousy.exe and dislike.exe running right now.

Tech Support: No problem, Love will gradually remove past-hurt.exe from your operating system. It may remain in your permanent memory but it will no longer affect other programs. Love will gradually replace low-self-esteem.exe with a program of its own called high-self-esteem.exe. However, you have to completely turn off jealousy.exe and dislike.exe. Those programs prevent Love from being properly set up on your system. Can you turn those off?

Customer: I don't know how to turn them off. Can you tell me how?

Tech Support: With pleasure. Go to your start menu and open never-mind.exe. Do this as many times as necessary until jealousy.exe and dislike.exe have been completely removed.

Customer: OK, done! Love has started opening. Is that normal?

Tech Support: Yes, but remember that you only have the base program. You need to begin connecting to other hearts in order to get it working properly.

Customer: Oops! I have an error message already. It says, "Error — program cannot run on other systems." What should I do?

Tech Support: Don't worry. It means that the Love program is not set up to run on your heart yet. In non-technical terms, it simply means you have to love yourself before you can love others.

Customer: So, what should I do?

Tech Support: Pull down self.exe; then highlight the following files: forgive-self.txt; realize-your-worth.txt; and know-your-limits.txt.

Customer: OK, done.

Tech Support: Now, copy them to the "My Heart" folder. The system will overwrite any files that were stopping your heart from running smoothly. Also, you need to remove self-hatred.txt from all folders and then restart your system to make sure it is completely gone and never comes back.

Customer: Got it. Hey! My heart is filling up with new files. I can already see that smile.mpg has started working, and peace.txt and happiness.txt are copying themselves all over my heart. Is this normal?

Tech Support: Sometimes. For others it takes a while. So, it sounds like Love is running correctly. One more thing before we hang up. Love is freeware. Be sure to share it with everyone you meet. They will share it with others in turn and return some cool stuff back to you.

Customer: I will. Thank you for your help.

487words

The point of this story
If we open our hearts we will find love. Holding on to negative feelings from the past will not make us happy. Wave goodbye to the bad feelings about others. The point of this story is that when you show love and kindness toward others — and yourself — then love and kindness will come back to you.

技術サポート担当：はい.....どうされましたか？

顧客：あの、私のシステムがきちんと動いていないようなんです。それで、良く考えた結果、「愛」をインストールすることにしました。インストールの手順を教えてくださいませんか？

技術サポート担当：承知しました。準備はよろしいですか？

顧客：えーと、私は技術的なことにあまり詳しくないのですが、大丈夫だと思います。まず何をすれば良いですか？

技術サポート担当：最初のステップは心を開くことです。心の場所は見つけましたか？

顧客：はい、でもほかにもいくつかのプログラムが実行されているようなのですが。それらが動いている最中に「愛」を追加しても大丈夫でしょうか？

技術サポート担当：どんなプログラムですか？

顧客：えーと、^{過去の傷}past-hurt.exe と ^{低い自尊心}low-self-esteem.exe、^{嫉妬}jealousy.exe と、それに ^{嫌悪}dislike.exe が同時に動いています。

技術サポート担当：問題ありません。「愛」は ^{過去の傷}past-hurt.exe を徐々にOSから消去していきます。固定記憶には残るかもしれませんが、ほかのプログラムに影響を与えることはなくなるでしょう。「愛」は次第に ^{低い自尊心}low-self-esteem.exe を ^{高い自尊心}high-self-esteem.exe という独自のプログラムに置き換えるでしょう。しかしながら、^{嫉妬}jealousy.exe と ^{嫌悪}dislike.exe は完全に消去しなければなりません。それらのプログラムがあると、システムに「愛」が適切にセットアップされませんので。それらを終了できますか？

顧客：どうやったら終了できるのか分かりません。やり方を教えてください。

技術サポート担当：もちろんです。スタートメニューに行って、^{気にしない}never-mind.exe を開いてください。^{嫉妬}jealousy.exe と ^{嫌悪}dislike.exe が完全に消去されるまで必要なだけ何度でもこれを実行してください。

顧客：はい、できました！ 「愛」が開き始めました。これでいいのですか？

技術サポート担当：ええ、ただあなたが持っているのは基本プログラムにすぎないことを忘れないでください。それを適切に作動させるためには、ほかの人たちの心に接続し始める必要があります。

顧客：あ！ もうエラーメッセージが出ました。「エラー —— プログラムはほかのシステムでは使えません」と書いてあります。どうしたらいいですか？

技術サポート担当：ご心配なく。「愛」プログラムがまだあなたの心で動作する設定ができていないだけです。技術用語以外で言うなら、単に、ほかの人を愛する前に自分を愛さなくてはいけないということです。

顧客：では、何をすればいいのですか？

技術サポート担当：メニューから ^{自分}self.exe を出してください。それから次のファイルをハイライトしてください。^{自分を許す}forgive-self.txt と ^{自分の価値に気づく}realize-your-worth.txt、あと ^{自分の限界を知る}know-your-limits.txt です。

顧客：はい、できました。

技術サポート担当：それでは、それらを「私の心」フォルダにコピーしてください。システムはあなたの心がスムーズに動くのを妨げていたファイルをすべて上書きします。また、すべてのフォルダから「^{自己嫌悪}self-hatred.txt」を消去し、それが間違いなく完全に消えて復活しないようにシステムを再起動させる必要があります。

顧客：分かりました。まあ！ 私の心に新しいファイルがいっぱいになってきました。すでに ^{笑顔}smile.mpg が起動したようですし、^{平和}peace.txt や ^{幸福}happiness.txt が自己増殖して私の心全体に広がっています。これは正常ですか？

技術サポート担当：そういうこともあります。もつと時間がかかる人もいます。では「愛」は正しく作動しているようですね。電話を切る前にもう一つお伝えすることがあります。「愛」は無料ソフトです。出会う人みんなと共有するようにしてください。彼らは同様にそれをほかの人たちと共有し、あなたに何かすてきなものを返してくれるでしょう。

顧客：そうします。ありがとうございました。

このストーリーのポイント

自分が心を開くと愛が見つかるでしょう。過去のネガティブな感情にしがみついていると幸せにはなれません。ですからほかの人に対する悪い感情にはさよならしましょう。この話のポイントは、あなたが他人に ——

そしてあなた自身に —— 対して愛と優しさを見せれば、あなたにもそれが返ってくるということです。

- *1 properly：適切に
- *2 install：...をインストールする
- *3 installation process：インストールの手順
- *4 hurt：傷
- *5 .exe：（コンピュータ用語）MS-DOSやWINDOWSで実行ファイル形式に付く 拡張子
- *6 self-esteem：自尊心、自己評価
- *7 jealousy：嫉妬
- *8 dislike：嫌悪
- *9 gradually：次第に、徐々に
- *10 remove：...を消去する
- *11 operating system：オペレーションシステム、基本ソフト、OS
- *12 permanent：永久の
- *13 affect：...に影響を与える
- *14 replace Awith B：AをBに置き換える
- *15 completely：完全に
- *16 turn off ...：...を追い出す
- *17 prevent～from ...：～が...するを防ぐ
- *18 never mind：気にしない
- *19 pull down ...：（メニュー）をプルダウンする、表示する
- *20 highlight：...をハイライトする、強調表示する
- *21 .txt：ファイルがテキストファイルであることを示すのに使われる拡張子
- *22 overwrite：...に上書きする
- *23 self-hatred：自己嫌悪
- *24 .mpg：動画ファイルに付く 拡張子
- *25 hang up：電話を切る
- *26 freeware：無料ソフト、フリーウェア
- *27 in turn：今度は、同様に
- *28 cool stuff：すてきなもの

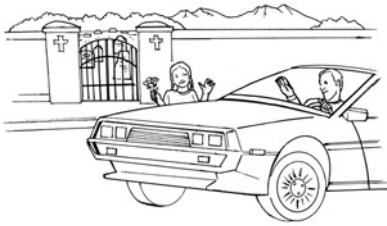
Mother's Day

母の日



子から親への愛

ある男性が花屋に立ち寄るところから物語は始まる。母の日のプレゼントに、花を郵送しようと思ったのだ。車から降りて花屋に向かう男性の目に止まったのは、バス停で泣いている女の子の姿。少女が泣いている理由は……。



DL 09_Mother's Day

A man stopped at a flower shop to order some flowers to be sent to his mother, who lived 200 miles away. He knew it would be better if he could actually go and see his mother, but these days he just ¹didn't seem to have any free time. ²Besides, he was sure she would understand.

As he got out of his car, he noticed a young girl sitting by the bus stop crying. “Hey, ³what's up?” he asked. “⁴Missed your bus?” “Oh no, the bus doesn't matter; I can walk,” she replied. “But I wanted to buy a red rose for my mother. The trouble is I only have 75 cents, and a rose costs two dollars.” The man smiled and said, “Come on in with me. I'll buy you a rose.”

He bought the little girl her rose and ordered his own mother's flowers. As they were leaving he offered the girl a ⁵ride home. “That would be great,” she said. “If you're sure you don't mind, you can take me to my mother.” “No problem. Just tell me which way,” he answered.

After a few minutes driving the girl asked the man to stop, and he ⁶pulled up to ⁷let her out. The girl thanked the man and said goodbye. ⁸It wasn't until she was walking ⁹hurriedly through the gates that he realized she was entering a ¹⁰graveyard. ¹¹Instead of ¹²driving off, the man ¹³watched on ¹⁴in disbelief as the girl ¹⁵bent down and placed the rose on a ¹⁶freshly dug grave.

Wiping the tears from his eyes, the man knew ¹⁷at once what he should do. Life is too short to spend worrying about work and deadlines and all of those other little duties that ¹⁸eat up your free time. We have to make time for the truly important things. He drove straight back to the flower shop, canceled his order, and bought a big ¹⁹bunch of flowers. He then drove the 200 miles to his mother's house.

332words

The point of this story
As we ²⁰go about our daily ²¹routines, spring turns to summer, and autumn to winter. Time passes so quickly that it's easy to overlook the people we love — the people we think of as always there. This story reminds us that we can never tell them we love them too often.

200マイル離れたところに住む母親に送る花を注文するため、ある男性が花屋に立ち寄りました。実際に母親に会いに行く方が良いことは分かっていたのですが、このところ自由な時間はとても取れそうにありませんでした。それに、母親は分かってくれるだろうと思っていました。

車から降りようとした時、彼はバス停のそばに少女が座って泣いているのに気がきました。「ねえ、どうしたの？」と彼は尋ねました。「バスに乗り遅れたのかい？」「ううん、バスは関係ないの。歩けるから」と彼女は答えました。「お母さんに赤いバラを買いたかったの。でも、75セントしかないのに、バラ一輪が2ドルだから困っていたの」。男性は笑顔で言いました。「一緒においで。君にバラを一輪買ってあげるよ」

彼はその少女にバラを買い、自分の母親への花を注文しました。店を出る時、彼は少女に家まで送ってあげると言いました。「それは助かるわ」と彼女は言いました。「もし本当にいいなら、お母さんのところまで連れて行ってほしいの」「問題ないよ。道だけ教えて」と彼は答えました。

車で数分走ったところで少女は車を止めるよう頼んだので、男性は少女が降りられるよう停車しました。少女は男性にお礼を言い、別れました。彼女が門を急いでくぐるのを見て初めて、彼は少女が墓地に入って行ったことに気がきました。男性は車で走り去ることをせず、少女が身をかがめて掘りたての墓所にそのバラを置くのを信じられない気持ちで見つめていました。

目からこぼれる涙をぬぐいながら、男性は自分が何をすべきかすぐに悟りました。人生はあまりにも短く、自由時間を奪ってしまう仕事や締め切り、また、ほかのこまごまとした用事について心配している暇はありません。私たちは本当に大切なことのために時間を割かなくてはならないのです。彼は花屋に真つすぐ引き返して注文を取り消し、大きな花束を買いました。それから200マイル運転して母親の家に行きました。

このストーリーのポイント
日々やるべきことをこなすうちに、春から夏になり、秋から冬に変わります。時の流れはあまりにも早く、愛する人たち——いつもいてくれると私たちが思っている人たち——をなぞりにしがちです。この話は私たちに、愛する人にいくら愛を伝えても十分すぎることはないということを思い出させてくれます。

¹1 don't seem to have ... : ...はありそうにない
²2 besides : それに、その上
³3 What's up? : どうしたの? 何があったの?
⁴4 miss : ...に乗り遅れる
⁵5 ride : 車に乗せること
⁶6 pull up : (車を)止める

- *7 let ... out : ...を外に出す
- *8 It wasn't until ~ that ... : ~して初めて...だった
- *9 hurriedly : 急いで
- *10 graveyard : 墓地
- *11 instead of ... : ...の代わりに
- *12 drive off : 車で走り去る
- *13 watch on : 監視する、注視する
- *14 in disbelief : 信じられない様子で
- *15 bend down : かがむ
- *16 freshly dug : 掘ったばかりの
- *17 at once : すぐに
- *18 eat up ... : ...を使い果す、奪う
- *19 bunch : 束
- *20 go about ... : ...に取り組む、取り掛かる
- *21 routine : 決まってすること、日課

What Is Love?

愛って何だろう？



「愛とは？」—— ある心理学者が出した哲学的な問いに4歳から8歳の子どもたちが答えている。子どもたちの言葉は、深く温かいものばかり。ビュアなハートからつむぎ出された「愛」の形とは？



DL 10_What Is Love?

Some psychologists asked a group of 4- to 8-year-olds the following question: “What is love?” The answers they got were broader and deeper than anyone could have imagined. See what you think:

- “When my grandmother got old, she couldn’t bend over and paint her toenails anymore. So now my grandfather does it for her — even though his hands hurt a lot these days. That’s love.” Rebecca — aged 8
- “When someone loves you, the way they say your name is different. You just know that your name is safe in their mouth.” Billy — aged 4
- “Love is when you give somebody most of your French fries without making them give you any of theirs.” Chrissy — aged 6
- “Love is what makes you smile when you’re tired.” Terri — aged 4
- “Love is when my mommy makes coffee for my daddy and she drinks a little bit before giving it to him, to make sure the taste is OK.” Danny — aged 7
- “Love is what’s in the room with you at Christmas, if you stop opening presents and listen.” Bobby — aged 7
- “Love is when you tell a guy you like his shirt, then he wears it every day.” Noelle — aged 7
- “Love is like a little old woman and a little old man who are still happy to see each other, even though they’ve lived together for their whole lives.” Tommy — aged 6
- “During my school play, I was on stage and I was very nervous. I looked at all the people watching me and saw my daddy waving and smiling. He was the only one doing that. I wasn’t nervous anymore.” Cindy — aged 8
- “My mommy loves me more than anybody. I know because she always kisses me to sleep at night.” Clare — aged 6
- “Love is when Mommy gives Daddy the best piece of chicken.” Elaine — aged 5
- “Love is when Mommy sees Daddy smelly and sweaty and still says he is more handsome than Brad Pitt.” Chris — aged 7
- “Love is when my pet dog licks my face when I come home after leaving him on his own all day.” Mary Ann — aged 4
- “I know my older sister loves me because she gives me all her old clothes and has to go out and buy new ones.” Lauren — aged 4
- “When you love somebody, your eyelashes go up and down and little stars come out of you.” Karen — aged 7
- “You really shouldn’t say ‘I love you’ unless you mean it. But if you mean it, you should say it a lot. People forget.” Jessica — aged 8

429words

The point of this story
As the story shows, love is not just one thing. Love shows itself in many ways. If you think about all of those ways, you will realize that there is much more love in your life than maybe you thought.

心理学者のグループが4歳から8歳の子どもたちに次の質問をしました。「愛って何だろう？」この問いに対する子どもたちの答えは、誰も想像し得なかったほど幅広く深いものでした。あなたはごどう思いますか。

- 「おばあちゃんは年を取ったから、かがんで自分の足にベディキュアを塗ることができなくなったの。だから今はおじいちゃんがやってあげているの —— 最近おじいちゃんは手が痛いのに。それが愛だと思う」レベッカ —— 8歳
- 「自分のことを大好きなだれかが自分の名前を呼ぶとき、なんだか違って聞こえるんだ。その人の口の中で自分の名前は安全なんだって分かる」ビリー —— 4歳
- 「自分のプライドポテトをほとんどだれかにあげても、その人のはもらわなくていいと思ったとき、それが愛だわ」クリッシー —— 6歳
- 「愛っていうのは、疲れている時に笑顔にしてくれるものだよ」テリー —— 4歳
- 「ママがパパのために入れたコーヒーを、味が大丈夫かどうか少し飲んで確かめてから渡す時、愛だと思う」ダニー —— 7歳
- 「クリスマスにプレゼントを開けるのをやめて耳を澄ました時、自分と一緒に同じ部屋にいるもの、それが愛だよ」ボビー —— 7歳
- 「自分がシャツを褒めてあげた男の人が毎日そのシャツを着るようになったら、それは愛だよ」ノエル —— 7歳
- 「年を取った女のひと男の人が、人生ずっと一緒に暮らしてきたのに今でもお互いを見て幸せだと感じる時、それは愛だよ」トミー —— 6歳
- 「学校で劇をやった時、私は舞台上ですごく緊張していたの。私をじっと見ている人たちを見たら、パパが笑顔で手を振っているのが見えたの。そんなことをしているのはパパだけだったわ。そのおかげで私はもう緊張しなかったの」シンディ —— 8歳
- 「ママは私のことを誰よりも愛してくれるわ。なぜ分かるかって言うと、夜寝る時に必ずキスしてくれるから」クレア —— 6歳
- 「愛っていうのは、ママがパパにチキンが一番おいしいところをあげること」イレイン —— 5歳
- 「愛っていうのは、ママが汗だくで臭いパパを見て、それでもパパはブラッド・ビットよりハンサムだって言うこと」クリス —— 7歳

「愛っていうのは、うちで飼っている犬が、一日中一人ぼっちにしたのに、私が家に帰ると顔をなめてくれること」メアリーアン —— 4歳

「お姉ちゃんが私のことを愛しているって分かるわ、だって自分が着た洋服を全部私にくれてわざわざ新しいのを買いに出掛けるんだから」ローレン —— 4歳

「誰かを愛していると、まつ毛が上がったり下がったりして目から小さな星が出てくるの」カレン —— 7歳

「もし本当に思っていないなら『愛している』と言っちゃ駄目よ。でももし本当に思っているなら、いっぱい言うべきだわ。みんなすぐ忘れるから」ジェシカ —— 8歳

このストーリーのポイント

この話が示しているように、愛とは一つのことだけを指すわけではありません。愛はいろいろな形を取ります。そういつたさまざまな愛の形について考えれば、自分が思っていたよりずっとたくさんの愛が自分の人生にはあると気付くでしょう。

- *1 psychologist：心理学者、精神科医
- *2 bend over：かがむ
- *3 toenail：足のつまめ
- *4 French fries：フライドポテト
- *5 play：劇
- *6 nervous：緊張して
- *7 smelly：におう、臭い
- *8 sweaty：汗だくの
- *9 lick：...をなめる
- *10 on one's own：独りで
- *11 eyelash：まつ毛
- *12 mean：本気で...と思う、本気で...と言う
- *13 realize：...に気付く、悟る、分かる

Eleanor Roosevelt

エレノア・ルーズベルト



家族愛と博愛

エレノア・ルーズベルトは、20世紀に活躍した女性として、アメリカで最も尊敬されている女性の一人だ。第32代アメリカ大統領フランクリン・ルーズベルトの妻であり、女性やマイノリティーに関する政策では夫に大きな影響を与えた。晩年、夫と死別した後は、世界人権宣言の起草にも貢献するなど、リベラル派の運動家としても活躍した。彼女は一体、どのような生涯を送ったのだろうか？



DL 11_Eleanor Roosevelt

In America, Eleanor Roosevelt is seen as one of the most important women of the 20th century. Married to President Franklin Roosevelt, she became the First Lady of the United States in 1933. But she is remembered even more for helping the poor and improving civil rights at a time when many people believed that women could never do anything important.

Eleanor was the daughter of a wealthy public figure in New York, and her early life was luxurious. But she also had plenty of grief. Eleanor's mother often made her young daughter self-conscious by pointing out her plain looks, and sometimes playfully called her “granny” because of the way she acted old-fashioned for her age. But sadly, Eleanor was only 8 years old when her mother died. Her father also passed away less than two years later, and Eleanor was alone.

Forced to live with her grandmother, Eleanor found herself lonely. Her life was stable, but not very loving. Her grandmother's only concern was Eleanor's education. Eleanor was not allowed to play like normal children, and her grandmother expected her to speak only if she was spoken to first. As a result, she had trouble fitting in socially with other children her age.

When Eleanor was sent to boarding school in England, it gave her a welcome break from her lonely childhood. She became an eager, intelligent and popular student. And after three years at boarding school, she had truly come out of her shell.

When Eleanor returned to New York in 1902, her grandmother expected her to blend in with other high-society women. But Eleanor wasn't very excited about the fancy-dress parties she was expected to attend. The parties did, however, introduce her to some of the people that would later change her life.

Like many other young women in her social circle, Eleanor became part of the New York Junior League. The group was a women's social organization that did volunteer work and helped the poor. Along with a friend, Eleanor visited the poorer areas of New York in order to teach exercise lessons and dancing to young girls. Later she began to visit factories for the first time, and witnessed some of the terrible working conditions there. The work helped Eleanor to understand how protected and privileged her youth had been.

Fortunately, she was able to share these experiences with a new friend — a distant cousin named Franklin Delano Roosevelt. She once asked him to accompany her during her social work so that he could see the poverty for himself. Franklin was deeply moved by what he had seen, and amazed at Eleanor's intelligence and kindness. Happily, Eleanor had found someone who matched her intellectually and emotionally. And on St. Patrick's Day in 1905, the couple was married.

Their relationship faced one of its toughest challenges when Franklin became paralyzed from the waist down due to a disease. He was forced to put aside his rising political career, and spent a long time trying to improve his health. Eleanor had to take over as the head of the family, looking after their five children while helping to nurse Franklin. While Franklin never fully recovered, he became well enough to return to active political life. With Eleanor behind him, He was elected governor of New York in 1929, and four years later became president of the United States.

Eleanor became one of Franklin's closest advisers in the White House, and they traveled around the country. Now used to public speaking, she even became the first “First Lady” to hold a press conference of her own, and in a surprising decision, invited only women reporters to attend.

But perhaps the proof of Eleanor's determination came when the Daughters of The American Revolution, a group she had been a member of, refused to let the African-American opera singer Marian Anderson perform in their building. Mrs. Roosevelt quit the organization to protest this racist decision, and gave her support to the free public concert that was later organized at the Lincoln Memorial.

Eleanor Roosevelt accomplished many more incredible things in her life. Despite her lonely, privileged background, Eleanor worked hard to learn about the lives of ordinary people, and then to help improve them. She once wrote, “You must do the thing you think you cannot do.” And it is unlikely that anyone imagined that the young girl who had been teased for being plain and old-fashioned would grow up to become such a strong, modern woman. Eleanor Roosevelt gave many of America's most neglected people a happier future, because she believed in doing what she thought she could not do.

771words

The point of this story
Eleanor Roosevelt was born into privilege. However, so too were we. If you look at the world, you will see there are many people much worse off than you. Eleanor's story should be a reminder that there is a greater world beyond our own cozy, social circles. We can all find and help people in need.

アメリカでは、エレノア・ルーズベルトは**20世紀**で最も重要な女性の一人と見なされています。フランクリン・ルーズベルト大統領の妻として、**1933年**に彼女はアメリカ合衆国のファーストレディになりました。しかしそれより、女性には重要なことなどできないと信じられていた時代に、貧しい人々を助け、公民権を改善したこととで、彼女は人々の記憶に一層深く残っています。

エレノアはニューヨークの裕福な名士の娘として生まれ、幼いころはぜいたくな暮らしをしていました。しかし、彼女は多くの悲しみも抱えていました。エレノアの母がよく娘の地味な外見を指摘したので彼女は人目を気にするようになり、また、母は彼女が年の割に古めかしい振る舞いをするををからかって、時々「おばあちゃん」と呼んだりもしました。しかし、悲しいことに、エレノアがまだ**8歳**の時に母は亡くなりました。父もまたそれから**2年**もたたないうちに他界し、彼女は独りになりました。

祖母と住むことを余儀なくされ、エレノアは孤独を感じていました。生活は安定していたものの、あまり愛情のある暮らしではありませんでした。祖母の唯一の関心はエレノアの教育に向いていました。エレノアは普通の子どものように遊ぶことが許されず、また、先に話し掛けられたとき以外は口を開かないよう祖母は求めました。その結果、彼女は同じ年ごろの子どもたちの仲間に溶け込むのに苦労しました。

イングランドにある寄宿学校に送られると、彼女は寂しい**幼少時代**に別れを告げることができてほっとしました。彼女は熱心で、聡明な人気者の学生になりました。寄宿学校で**3年**を過ごした後は、彼女は本当の自分を取り戻していました。

1902年にニューヨークに戻ると、祖母は彼女に上流階級の女性たちに溶け込むことを期待しました。しかしエレノアは、出るように言われたものの、豪華なドレスで着飾ったパーティーにはあまりわくわくしませんでした。しかし、それらのパーティーのおかげで、エレノアは後に自分の人生を変える人たちに出会うことができたのです。

その社交界にいる多くの若い女性たちと同様、エレノアはニューヨーク・ジュニアリーグのメンバーになりました。その団体は女性の社会的組織で、ボランティア活動を行い、貧しい人々を助けていました。彼女は少女たちに運動やダンスを教えるため、友人の一人と一緒にニューヨークの貧困層が住む地域を訪れました。後には、彼女は初めて工場を見学するようになり、そのいくつかでひどい労働条件を目にしました。そこでの活動によって、エレノアは自分の**幼少期**がいかに守られ、恵まれていたかを理解しました。

幸運にも、彼女はこれらの経験を新しくできた友人——フランクリン・デラーノ・ルーズベルトという遠い親戚と共有することができました。彼にも自分の目で貧困を見てもらおうと、彼女は一度、自分の社会活動に同行するよう彼を誘いました。フランクリンは自分が目にしたものに非常に心を動かされ、またエレノアの知性と優しさに驚きました。幸せなことに、エレノアは知性の面でも感情の面でも自分に見合う人を見つけたのです。そして二人は**1905年**のセント・パトリック・デーに結婚しました。

フランクリンが病気で下半身まひになった時、彼らの関係は最も厳しい試練の一つを迎えました。彼は勢いに乗りつつあった政治家としてのキャリアを中断することを余儀なくされ、長い間健康の回復に専念しました。エレノアはフランクリンの看護をしながら**5人**の子どもたちの世話をし、彼に代わり家長を引き継がなければなりませんでした。フランクリンは完全には回復することはありませんでしたが、活発に政治活動を行うことができるまで良くなりました。エレノアの支えもあり、彼は**1929年**にニューヨーク州知事に選出され、その**4年**後にアメリカ合衆国大統領になりました。

エレノアはホワイトハウスでフランクリンにもっとも近い相談役の一人になり、一緒に国中を回りました。もう人前で話すことにも慣れ、彼女は自分の記者会見を開いた最初の「ファーストレディ」にまでなり、女性記者のみを招待するという驚きの決定を下しました。

しかしエレノアの決意の固さを証明したのは、おそらく、「アメリカ革命の娘たち」という、彼女が所属していた団体がマリアン・アンダーソンというアフリカ系アメリカ人オペラ歌手に自分たちのビルで歌うことを拒否した時でした。ルーズベルト夫人はこの人種差別的決定に抗議してこの団体を脱退し、後にリンカーン記念館で開かれた無料の一般向けコンサートを支援しました。

エレノア・ルーズベルトはその生涯で、ほかに多くの偉業を成し遂げました。孤独に包まれた、特権階級の出であるにもかかわらず、エレノアは普通の人々の生活について学び、そしてそれを改善しようと努力しました。彼女はかつてこう書いています。「自分にできないと思ったことをやらなければいけません」。地味さや古めかしい振る舞いをからかわれた少女が、そのような強く現代的な女性になるとは誰も予想できなかったでしょう。エレノア・ルーズベルトは、不可能だと思ったことをすることを信じていたから、アメリカで最も顧みられることのなかった多くの人々に幸せな未来を与えたのです。

このストーリーのポイント

エレノア・ルーズベルトは特権階級に生まれました。実はわれわれもそうなのです。世界を見渡せば、自分よりもっとずっと貧しい生活をしている人はたくさんいます。エレノアの話は、自分の快適な社会の外にはもっと大きな世界が広がっているということを思い出させてくれます。われわれは皆、困っている人々を見つけて助けることができるのです。

^{*1} see Aas B：AとBを見なす、考える

^{*2} civil rights：公民権

^{*3} public figure：著名な人物、名士

^{*4} grief：悲しみ

^{*5} self-conscious：内気な、人目を気にする

^{*6} plain：地味な

^{*7} playfully：ふざけて、冗談に

^{*8} granny：おばあちゃん、おばさん

^{*9} pass away：亡くなる

^{*10} stable：安定した、しつかりした

^{*11} fit in：なじむ、適応する

^{*12} socially：社会的に

^{*13} boarding school：寄宿学校、全寮制学校

^{*14} give A a welcome break from B：Bに別れを告げてAはほっとする

^{*15} eager：熱心な、やる気のある

^{*16} come out of one's shell：殻から出る、心を開く

^{*17} blend in with ...：...に溶け込む

^{*18} high-society：上流階級の

^{*19} NY Junior League：ニューヨーク・ジュニアリーグ。1901年に設立された、女性のみのボランティア団体

^{*20} witness：...を目にする、...を目撃する

^{*21} privileged：恵まれている、特権を持つ

*22 accompany: ...に同行する、付き添う

*23 poverty: 貧困

*24 be amazed at ... : ...に驚かされる

*25 intellectually: 知的に

*26 St. Patrick's Day: セント・パトリック・デー（毎年3月17日。アイルランドの守護聖人セント・パトリックを祝う日）

*27 paralyzed : まひして

*28 waist down : 下半身の

*29 due to ... : ...が原因で、...のせいで

*30 take over as ... : ...を引き継ぐ

*31 nurse : ...を看病する

*32 governor : 州知事

*33 public speaking : 演説、人前でスピーチをすること

*34 press conference : 記者会見

*35 determination : 決意

*36 Daughters of The American Revolution (=DAR)：「アメリカ革命の娘たち」（略称DAR）。アメリカの独立を支えた人たちの女性子孫から成る愛国的ボランティア活動団体

*37 protest: ...に抗議する

*38 racist: 人種差別的な

*39 Lincoln Memorial : リンカーン記念館。ワシントンD.C.にあるリンカーン大統領の記念館

***40** accomplish : ...を成し遂げる

***41** incredible : すごい、驚くべき

*42 ordinary: 普通の

*43 it is unlikely that ... : ...とは思えない

*44 neglected: 見過ごされている、なおざりにされている

*45 much worse off: もっとずっと貧しい

*46 reminder: 思い出させるもの

*47 cozy: 居心地がいい、快適な

***48 people in need** : 困っている人々

Chapter 3

前向きになる話

What Is Happiness?

幸せとは？



足るを知る心

身なりも髪型もきちんとした、92歳のすてきなおばあさんが老人ホームに現れた。今日からホームでの暮らしをスタートするようだ。部屋に案内される途中で室内の様子を看護師から聞いたおばあさんは……。



DL 12_What Is Happiness?

A ¹petite and ²proud 92-year-old lady, who is fully dressed each morning by 8 o'clock in perfectly ironed clothes, with her hair fashionably done, even though she is almost blind, moved to our ³nursing home today. Her ⁴husband of 70 years recently passed away, making the ⁵move necessary.

After many hours of waiting for me quietly in the ¹reception of the nursing home, she smiled ²brightly when I told her that her room was ready. As she moved her ³walker to the elevator, I provided a ⁴visual description of her tiny room, including the curtains that had been hung on her window. “I love it,” she ⁵stated, like an 8-year-old who had just been given a new toy. “Mrs. Jones, you haven't seen the room yet.” “That ⁶doesn't have anything to do with it,” she replied. “Happiness is something you decide on ⁷ahead of time. Whether I like my room or not doesn't ⁸depend on how the furniture is arranged, it's how I arrange my mind. I've already decided to love it.” “You have?”

“Sure. It's a decision I make every morning when I wake up. I ⁹have a choice: I can spend the day in bed worrying about the parts of my body that no longer work, or I can get out of bed and be happy about the ones that do. Each day is a gift, and as long as my eyes open, I'll welcome the new day and enjoy all the happy memories I've ¹⁰stored away just for this time in my life.”

256words

The point of this story
It may sound surprising, but this story tells us that we can choose to be happy. If you think that you are not going to like something, you will be looking for bad things to confirm your ¹¹prejudice. On the other hand, if you decide that you are going to like something, you will approach it positively—looking for everything good about it. So, whether something makes you happy or not, largely depends on your ¹²attitude.

ほとんど目が見えないにもかかわらず、毎朝8時までには完ぺきにアイロンがけされた洋服に着替えて、しゃれた髪型に整える、小柄ながら堂々とした92歳の女性が私どもの老人ホームに今日入居しました。70年間連れ添った夫が最近亡くなり、彼女は引っ越しを余儀なくされたのです。

老人ホームの受付で何時間も静かに私を待っていた彼女は、部屋の準備ができたことを私が告げると明るくほほ笑みました。彼女が自分の歩行器でエレベーターまで移動する間に、私は窓にかけられたカーテンも含め、彼女の小部屋の見た目を説明しました。彼女は新しいおもちゃをもらったばかりの8歳児のように、「すごく気に入ったわ」と言いました。「ジョーンズさん、まだお部屋をご覧になっていませんよ」「そんなことは関係ないわ」と彼女は答えました。「幸せっていうのはあらかじめ決めることなのよ。部屋を気に入るかどうかということは、家具の配置によって決まるわけではなく、自分の心をどう整えるかによって決まるのよ。私はその部屋をすごく気に入ると決めたの」「もう決めたんですか？」

「もちろん。私は毎朝起きると決めるの。私には選択権があるのよ。体のもう機能しない部分のことを心配しながらその日をベッドで過ごすこともできるし、ベッドから出て、まだ動く部分があるのをうれしく思うこともできるの。一日一日が贈り物で、毎朝目が開くうちは、その新しい日を喜んで迎え、人生のこの時のためにしまっておいた幸せな思い出の数々を楽しむつもりよ」

このストーリーのポイント
意外に聞こえるかもしれませんが、この話が教えてくれるのは、幸せになることを選べるのだということです。もしあなたが何かを好きにならないだろうと思ったら、あなたは自分の先入観が正しいと裏付けるような悪いことばかり探すでしょう。一方、もし何かを好きになると決めたら、あなたは前向きな態度で接するでしょう——つまり良いことばかりを探すはずです。ですので、あなたが何かによって幸せになるかどうかということは、自分の心構えによるところが大きいのです。

¹1 petite：小柄な、きゃしゃな
²2 proud：誇りを持っている、堂々とした
³3 nursing home：老人ホーム、養護施設
⁴4 husband of 70 years：70年間連れ添った夫
⁵5 move：引っ越し

- *6 reception : 受付
- *7 brightly : 明るく
- *8 walker : 歩行（補助）器
- *9 visual description : 目に見えるような説明
- *10 state : 言う、述べる
- *11 not have anything to do with ... : ...とは関係がない
- *12 ahead of time : 前もって、事前に
- *13 depend on ... : ...次第である、...によって決まる
- *14 have a choice : 選択権がある、自由に選べる
- *15 store away : 取っておく、心にとどめておく
- *16 prejudice : 偏見、先入観
- *17 attitude : 態度、心構え、姿勢

This Is Good

これでいいんだ



あるアフリカの王には仲良しの幼なじみがいた。その友人は、何事も「これでいいんだ」と、物事を前向きにとらえる性格の持ち主だった。しかし、ある日二人で狩りに出掛けた時、その口癖がきっかけで二人の間に仲たがいが起こり……。



DL 13 This Is Good

There was once an African king who had a very good friend. They had grown up together, and now that they were men they still spent every day in each other's company. The friend was always fun to be with because he had such a bright and happy attitude toward life. In fact, whatever happened, whether good or bad, the friend would always say, "This is good!"

One day the king and his friend were out hunting. The friend was loading and preparing the guns for the king. Unfortunately the friend did something wrong when preparing one of the guns, and after taking the gun from his friend, the king fired it and his thumb was blown off. Examining the situation, the friend said as usual, "This is good!" To which the king replied, "No, this is definitely not good!" and he sent his friend to jail.

About a year later, the king was hunting in an area that he should have known to stay clear of. As he crept quietly into a dark forest, he suddenly went from being a hunter to being the hunted. He was surrounded by cannibals, who caught him and took him back to their village. They forced him to lie on top of a large pile of wood, and then began tying his feet and hands to the wood. But just as they were about to set fire to the wood, one of them screamed, noticing that the king was missing a thumb. They believed that eating someone who was less than whole would bring them bad luck. So they released the king and sent him on his way.

As he returned home, the king remembered how he had lost his thumb and felt terrible for the way he had treated his friend. He immediately went to the jail to speak with his friend. "You were right," he said, "it was good that my thumb was blown off." He told his friend about his lucky escape. "And so I'm very sorry for sending you to jail for so long. It was bad of me to do this."

"No," his friend said, "This is good!" Shocked, the king asked, "What do you mean, 'This is good'? How could it be good that I sent you to jail for a year?" His happy friend replied, "If I had not been in jail, I would have been with you."

402words

The point of this story
Just because something bad happens to us, it does not mean that nothing good will come of it. For example, such disappointments as, "If I had got into the best university ..." or, "If I hadn't missed the bus ..." or, "If I had not broken up with my partner ..." may all be followed by, "I would never have met you!"

昔、アフリカにとっても良い友人を持つ王がいました。彼らは幼なじみで、大人になった今でも毎日一緒に過ごしていました。その友人の生きる姿勢はとても明るく幸せなもので、いつも一緒にいて楽しい人でした。実際、良い悪いに関わらず、何が起こっても決まって、「これでいいんだ！」と言っていました。

ある日、王と友人は狩りに出ていました。友人は王のために銃に弾を込め準備をしてあげていました。不運にも、友人は準備した銃の一つに何かミスをしてしまい、その銃を王が友人から受け取って撃つと、片方の親指が吹き飛んでしまいました。状況を調べながら、友人はいつものように「これでいいんだ！」と言いました。それに対し王は、「いや、断じていいわけがない！」と言い、友人を投獄してしまいました。

約1年後、王は近づいてはいけないうちで知っていたはずの区域で狩りをしていました。音を立てず暗い森にゆつくりと入って行った時、彼は突然狩る立場から狩られる立場になってしまいました。人食い部族に囲まれ、捕えられて彼らの村に連れて行かれました。彼らは王を大きなまきの山の上に横たわらせ、それから王の足と手をまきに縛りつけようとした。しかし、彼らがそのまきに火をつけようとしたちょうどその時、部族の一人が王の親指が一本ないことに気付いて叫びました。彼らは完全でない人間を食べると不幸になると信じていました。それで彼らは王を解放し、家に帰らせました。

王は帰宅すると、親指を失ったいきさつを思い出し、自分が友人にした仕打ちをひどく後悔しました。そして王はすぐさま牢屋^{ろう}に行き、友人と話しました。「君は正しかったよ」と王は言いました。「僕の親指が吹き飛んで、本当に良かった」。王は友人に運良く脱出できた話を聞かせました。「そういうわけで、君をこんなに長い間投獄して本当にすまなかった。こんなことをして僕が悪かった」

「いや」と友人は言いました。「これでいいんだよ！」王は仰天し、尋ねました。「『これでいいんだ』とはどういう意味だい？ 僕が君を1年間も投獄したことのどこが良いつて？」幸せな友人は答えました。「もし牢屋にいなかったら、僕は君と一緒にいただろうからね」

このストーリーのポイント
何か悪いことが起きたからといって、その結果何も良いことが起きないということではありません。例えば、「もし一番良い大学に行っていたら……」「バスに乗り遅れていなければ……」「恋人と別れていなければ……」といった落胆の後には全部「決してあなたに会えていなかっただろう！」という言葉が続くかもしれませんよ。

-
- *1 grow up together : 幼なじみである
英 11 歳
- *2 man : 成人した男性
英 12 歳
- *3 in each other's company : 一緒に
英 13 歳
- *4 load : (銃)に弾を装てんする
英 14 歳
- *5 unfortunately : 不運にも、あいにく
英 15 歳
- *6 fire : (銃)を撃つ、発射する
英 16 歳
- *7 thumb : 親指
英 17 歳
- *8 blow off ... : ...を吹き飛ばす
英 18 歳
- *9 examine : ..を調べる、観察する
英 19 歳
- *10 definitely : 全く、確実に
英 20 歳
- *11 jail : 刑務所、拘置所
英 21 歳
- *12 stay clear of ... : ...に近づかない
英 22 歳
- *13 crept : creep (忍び寄る、ゆっくり進む)の過去形
英 23 歳
- *14 cannibal : 人食い部族、人食い人間
英 24 歳
- *15 force : ...を強いる
英 25 歳
- *16 tying : tie (縛る)の動名詞
英 26 歳
- *17 be about to ... : ...しようとする
英 27 歳
- *18 send ... on one's way : ...を送り出す、...を帰らせる
英 28 歳
- *19 feel terrible : 申し訳ないと思う
英 29 歳
- *20 immediately : すぐに、早急に
英 30 歳
- *21 escape : 脱出
英 31 歳
- *22 come of ... : ...から生じる、起こる
英 32 歳

教訓

成功するためには、限られた目標を設定するべきではありません。私たちは皆、自分の人生がなぜこの程度なのか説明する理由を見つけることができます。例えば、運や上司、あるいは政治家……といったものを責めることもあるでしょう。これらの言い訳には一理あるかもしれませんが、この話から分かるように、それらすべての根底には必ず共通することが一つあります：あなた自身です。小さな目標しか立てなければ、得られる成

果も小さいことでしょう。

- *1 greet：...を迎える、...にあいさつする
- *2 handwritten：手書きの
- *3 pay one's last respects：最後のお別れを言う
- *4 progress：進歩
- *5 privately：ひそかに
- *6 be relieved：安堵している
- *7 body：遺体
- *8 set limits to ...：...に制限を設ける
- *9 CEO (=chief executive officer)：最高経営責任者、CEO
- *10 former：かつての、これまでの
- *11 potential：潜在能力、可能性
- *12 become a success：成功する
- *13 blame：...を責める
- *14 politician：政治家
- *15 there is some truth in ...：...には一理ある
- *16 excuse：言い訳、弁解
- *17 beneath ...：...の下に
- *18 achievement：成果、業績

The Cracked Pot

ひびの入ったかめ



個性の大切さと自尊心

インドのある水運び人は毎日、主人の城まで大きな二つのかめで水を運んでいた。実は、片方のかめにはひびが入っていて、そのかめは、城まで満杯の水を運べない自分をいつも責めていたのだが.....。



DL 15 The Cracked Pot

A water carrier in India had two large pots, each hung on the end of a pole which he carried across his shoulders. One of the pots was perfectly made with no cracks or holes. The other pot had a crack in it, so that by the time the water carrier reached his master's house it was only half full.

This situation went on daily for two years, with the carrier delivering only one and a half pots of water to his master's house. Of course, the perfect pot was proud that it was doing such a good job. But the poor cracked pot was ashamed of its fault, and disappointed that it was only able to manage half of what it was supposed to do.

After two years of this bitter failure, the cracked pot spoke to the water carrier one day by the stream. "I am ashamed of myself, and I want to say sorry to you." "Why?" asked the carrier. "What are you ashamed of?" "I have been able, for these past two years, to deliver only half my load, because this crack in my side lets the water drip out all the way back to your master's house. Because I'm not perfect, you have to do all of this work, without getting full value for your efforts," the pot said.

The water carrier was surprised that the old cracked pot felt this way, and said, "As we return to the master's house, I want you to notice the beautiful flowers along the path."

So, as they went up the hill, the old cracked pot took notice of the sun warming the beautiful wild flowers at the side of the path, and this cheered it a little. But at the end of the journey, it still felt bad for having let half of its water drip away, and so again the pot said sorry to the carrier for its failure.

The carrier said to the pot, "Didn't you notice that the flowers were only on your side of the path, and not on the other pot's side? That's because I have always known about the crack in your side, and I took advantage of it. I planted flower seeds on your side of the path, and every day while we walked back from the stream, you've watered them. For two years I have been able to enjoy watching these beautiful flowers grow. I've also picked them to display on my master's table. Without you being just the way you are, he would not have had this beauty to grace his house."

From that day forward, the cracked pot knew that what it had thought of as a weakness was actually a strength. Now on their daily journey along the path, the cracked pot was proud of the water dripping from the crack in its side.

478words

The point of this story

The fact of the matter is that we're all cracked pots. Each of us has our own unique faults. But if we accept them, we can use these differences to make the world a more interesting and better place. After all, if everyone was exactly the same, there would be no surprises, no discoveries to be made, indeed, no beauty in the world. So, don't be afraid of what you may think of as your faults. Accept them and remember that there is no such thing as perfection, and it is only through our differences that we can make a beautiful world together.

インドのある水運び人は大きなかめを二つ持っており、両肩に渡した竿の両端の一つずつぶら下げて水を運んでいました。一つのかめはひびも穴もなく、完ぺきな出来でした。しかしもう一つの方にはひびが一つ入っており、そのため、水運び人が主人の家に着くころには、中の水は半分だけになっていました。

この状況は2年間続き、水運び人は毎日、かめ一杯と半分だけの量の水を主人の家に届けていました。もちろん、完ぺきな方のかめはとても良い仕事をしていることに自信を持っていました。しかし、ひびの入ったかわいそうなかめは自分の欠陥を恥じ、すべき仕事の半分しかできていないことに落胆していました。

2年間このつらい失敗を経験した後、ひびの入ったかめはある日、小川のそばで水運び人に言いました。「自分が恥ずかしいです。それにあなたにも謝りたくて」「なぜ？」と水運び人は言いました。「何を恥じているんだい？」「この2年間、私は自分の荷の半分しか運べませんでした。というのも、脇にあるひびのせいで、ご主人様の家に帰るまでずっと水が滴り落ちてしまうのです。私が完ぺきでないために、あなたは同じように仕事を頑張っても、努力に見合った価値を得られません」とそのかめは言いました。

水運び人は、古い方のかめがこんなふうに感じていたことに驚き、言いました。「ご主人様の家に帰る時、この小道沿いに咲く美しい花々を見てごらん」

そう言われ、そのひび割れた古いかめは、丘を登る時、太陽のぬくもりを浴びて道端に咲く野生の美しい花々に気を留め、少し元気になりました。しかしその道のりが終わるころには、また水の半分をこぼしてしまったことに罪悪感を持ちました。そして水運び人に自分の失敗を再度謝りました。

水運び人はかめに言いました。「君が通った側だけに花が咲いていて、もう片側には咲いていなかったことに気付かなかったのかい？ なぜなら、僕は君の側面にあるひびのことを前から知っていて、それを利用したからなんだよ。君が通る側にだけ花の種をまいておいて、毎日小川から歩いて帰る時、君は彼らに水をまいてくれたんだよ。僕は2年間この美しい花々が育つを見て楽しむことができた。それだけじゃなく、その花たちを摘んでご主人様のテーブルの上にも飾ったのさ。君が今の君でなかったら、ご主人様もこの美しい花で家を優雅に飾るという恩恵にあずかることができなかっただろう」

その日以来、ひびの入ったかめは、自分が今まで弱点だと思っていたことが実は強みであるということを知りました。今では、毎日小道を通る道すがら、ひびの入ったかめは自分の脇のひびから水が滴り落ちるのを誇らしく思うようになりました。

このストーリーのポイント

実は、私たちは皆、ひびの入ったかめなのです。それぞれが自分だけの欠点を抱えています。しかしこの違いを受け入れれば、それを使って世界をより面白く、より良い場所にする事も可能なのです。そもそも、もしみんなが全く同じなら、世界には驚きも、発見も、もちろん、美しさもないでしょう。ですから、自分が欠点だと思うものを恐れなてください。それを受け入れ、この世には完ぺきなものなんてないのだ、違いがあるからこそ共に美しい世界を築くことができるのだということを覚えていてください。

- *1 carrier：運ぶ人
- *2 pot：つぼ、かめ
- *3 hung：hang（...をかける、つるす）の過去分詞形
- *4 crack：ひび
- *5 master：主人
- *6 poor：かわいそうな、哀れな
- *7 ashamed of ...：...を恥じて
- *8 fault：短所、欠陥
- *9 stream：小川
- *10 drip out：滴り出る、ボタボタと落ちる
- *11 full value：十分の価値
- *12 take notice of ...：...に気付く、注目する
- *13 take advantage of ...：...を利用する、...を生かす
- *14 seed：種
- *15 water：...に水をやる
- *16 be just the way you are：ありのままにいる
- *17 grace：...を優雅にする、飾る
- *18 the fact of the matter is ...：実のところ...である
- *19 after all：そもそも、結局
- *20 indeed：本当に、全く、実に
- *21 perfection：完ぺき、完全

Determination and Persistence

不屈の精神



あきらめない心

1883年の完成以降、マンハッタン島とブルックリン地区を結ぶ橋として、重要な役割を果たしているブルックリン橋。観光名所としても有名なこの橋、実はその完成の裏に、ある家族の壮絶なドラマがあった。



DL 16 Determination and Persistence

In the 1860s, a creative engineer named John Roebling had the surprising idea of building an enormous bridge across the East River connecting New York with Brooklyn. Nothing like it had ever been tried before, and many bridge-building experts claimed that it was an impossible task. They told Roebling to forget the idea. The engineering was too difficult, and the river was much too wide.

Roebling did not listen. He thought about the bridge all the time. He could see in his head how it had to be built, and he wanted to try. But first he needed help. Roebling began talking about the project with his son Washington. Washington was an up-and-coming engineer as well, and after some discussion he decided to join his father. Working together, the father and son developed several new ways that such a long bridge could be made strong enough to carry so much weight. Full of excitement for the challenge ahead of them, the two Roeblings hired a crew. Then they began to measure the land and choose the exact place where the bridge would stand. Unfortunately, early in the project, John Roebling was injured in an accident. At first, his injury seemed minor, but soon, it caused an infection which became worse and worse. The infection took John Roebling's life, but before he died, he put Washington in charge of the Brooklyn Bridge project. Sadly, Washington's luck was not much better. Only three years after his father's death, Washington also became ill and, as a result, was forced to stay in bed. Unable to leave the house, Washington was only able to watch the bridge being built through a telescope at his window. And the project wasn't even close to being finished. Washington's wife, Emily Roebling, became both his nurse and his assistant. Emily fought for her husband's right to continue as chief engineer for the bridge project. She helped to convince everyone that Washington was still able to do the engineering work that the bridge needed. With Washington's help, Emily studied engineering and mathematics until she too had become an expert. She traveled back and forth from the bridge, giving Washington's instructions to the workers, and returning to Washington with information about the bridge's progress.

For the next 11 years, Washington and Emily worked together to finish the Brooklyn Bridge. Emily spoke to workers, politicians and engineers, and earned the respect of many people. When the bridge was finally opened in 1883, Washington wasn't able to go to the opening ceremony. However, he watched with pride as his wife became the very first person to cross the bridge. Today the beautiful Brooklyn Bridge stands as a symbol of patience and perseverance. It started only as John Roebling's dream. Yet, despite the accidents and setbacks, the bridge was finally built through hard work, the understanding and drive of a family, and the love that held them together even in difficult times. Perhaps this is one of the best examples of a never-say-die attitude, an attitude that allowed Washington and Emily Roebling to succeed despite a series of terrible events. Together they built what was then the world's longest suspension bridge.

Often, when we face problems in our everyday life, they are much smaller than the problems that other people have to face. The Brooklyn Bridge is one example of a project that seemed impossible at first, but was finished because of the persistence and determination of people who worked hard and supported one another, no matter what the odds were.

The point of this story

This story is obviously about how hard work and determination can succeed, despite the negative opinions of others. But there is more that we can take from this story. We should not be too ready to say something is impossible. Just because something has never been done before does not mean it will not be done in the future. Let's try to encourage ambitious people, not discourage them.

1860年代のこと、ジョン・ローブリングという創造工学の技術者が、ニューヨークとブルックリンを結ぶ巨大な橋をイーストリバーに架けるという驚くべき考えを持っていました。そのような試みはこれまで一度もなされることがなく、架橋工事の専門家の多くはそれを不可能な事業だと主張しました。彼らはローブリングにそんな考えは忘れるよう言いました。必要な土木工事は非常に難度が高く、また橋を架けるにはあまりにも川幅が広すぎたからです。

しかしローブリングは聞き入れませんでした。彼はその橋のことを四六時中考えました。彼はそれをどうやって建てるべきか頭の中に描けていましたし、挑戦したいと思いました。しかしまずは援助が必要でした。ローブリングはそのプロジェクトについてまず息子のワシントンに話し始めました。ワシントンも新進気鋭の技術者で、いくらか議論を重ねたあと、父を手伝うことに決めました。

父と息子と一緒に作業し、そのような長い橋がそれだけの重みに耐える強度を持つための新しい方法をいくつか開発しました。自分たちの前に立ちはだかっている挑戦にわくわくしながら、ローブリング親子は作業員チームを雇いました。そして、土地の計測や、橋を架けるのに最適な場所選びを開始しました。

不運にも、プロジェクトの初期段階で、ジョン・ローブリングは事故で怪我をしました。最初、その傷はささいなものに見えましたが、間もなく感染症を引き起こ

し、どんどんひどくなりました。その感染症によってジョン・ローブリングは命を落としましたが、彼は亡くなる前、ブルックリン橋のプロジェクトをワシントンに任せました。

残念ながら、ワシントンもそれほど運が良いとは言えませんでした。父の死からたった3年後、ワシントンも病気になる、結果として、寝たきりを余儀なくされました。外出することもできず、ワシントンは窓から望遠鏡で橋の建設を見ることしかできませんでした。そしてそのプロジェクトは完成からは程遠い状況だったのです。

ワシントンの妻エミリー・ローブリングは彼の看護をしながらアシスタントも務めるようになりました。エミリーは夫が引き続き架橋プロジェクトのチーフエンジニアでいられる権利のために戦いました。彼女はワシントンが架橋工事に必要な土木工事の仕事を継続できるよう、みんなを説得する手助けをしました。ワシントンの協力で、エミリーは工学と数学を学び、彼女もまた専門家にまでなりました。彼女は何度も橋と家を行ったり来たりしてワシントンの指示を作業員に伝え、また帰って架橋工事の進ちょくをワシントンに報告しました。

その後11年間、ワシントンとエミリーはブルックリン橋の完成のために共に働きました。エミリーは作業員や政治家、技術者と話し、多くの人の尊敬を集めました。1883年に橋がついに開通した時、ワシントンは開通式典に出ることができませんでした。しかし、妻が最初にその橋を渡るのを誇らしく見ていました。

現在、その美しいブルックリン橋は忍耐と粘り強さの象徴になっています。始まりはジョン・ローブリングの単なる夢でしたが、事故や挫折にもかかわらず、その橋は努力、家族の理解と推進力、そして困難な時でも彼らをつづけてきた愛によって完成しました。

おそらくこの話は、決してあきらめない姿勢を表した最高のお手本の一つであり、ワシントンとエミリー・ローブリング夫妻はこの姿勢により、いくつもの最悪な出来事を乗り越え成功することができました。彼らは協力し、当時世界で一番長いつり橋を建てたのです。

私たちが日常生活で直面する問題は、他人が抱えている問題よりもずっとささいなものであることもしばしばです。ブルックリン橋は最初不可能と思われたにもかかわらず、成功の可能性はどうあれ、努力しお互いを支え合った人たちの粘りと決意によって完成したプロジェクトのお手本なのです。

このストーリーのポイント
言うまでもなく、この話は他人の否定的な意見があっても、努力と決意があればいかに成功できるかということを伝えています。しかしこの話から学べることはほかにもあります。私たちは何かが不可能だと簡単に言うべきではないということです。これまで誰もやらなかったというだけでは、今後もできないという理由にはなりません。意欲的な周りの人のやる気をくじくのではなく、勇気づけるようにしましょう。

- *1 creative engineer：創造工学の技術者
- *2 enormous：巨大な
- *3 claim：...と主張する
- *4 engineering：土木工事、工学
- *5 up-and-coming：将来有望な、新進気鋭の
- *6 full of excitement for ...：...への興奮に満ちて
- *7 crew：一団の作業員
- *8 measure：...を計測する
- *9 exact：正確な、的確な
- *10 minor：小さな、ささいな
- *11 infection：感染症
- *12 put A in charge of B：AにBを任せる
- *13 telescope：望遠鏡
- *14 not even close to ...：...とは程遠い
- *15 fought：fight（戦う）の過去形
- *16 right：権利
- *17 convince：...を説得する
- *18 earn the respect of ...：...の尊敬を得る
- *19 stand as...：...として存在する
- *20 perseverance：忍耐、不屈
- *21 setback：つまづき、後退
- *22 drive：推進力、やる気
- *23 never-say-die：決してあきらめない、不屈の
- *24 what was then：当時
- *25 suspension bridge：つり橋
- *26 persistence：粘り強さ
- *27 odds：可能性、見込み、勝算
- *28 be too ready to ...：...しやすい
- *29 ambitious：野心的な、意欲的な

Chapter 4

人・社会との関わりについての話

Growing Good Corn

おいしいとうもろこしを育てる秘けつ



他者への貢献

州の品評会にとうもろこしを出品し、ほぼ毎年優勝している農場主がいた。ある新聞記者が、質の良いとうもろこしを育てる秘けつを本人に尋ねてみると……。



DL 17_Growing Good Corn

Once, there was a Nebraska farmer who grew excellent corn. Each year he entered his corn in the ¹state fair, where it almost always won the ²blue ribbon prize. One year a newspaper reporter interviewed the farmer and ³learned something interesting about how he grew his corn. The reporter discovered that the farmer shared his ⁴seed corn with his neighbors.

⁵“How can you afford to share your best seed corn with your neighbors, when they are entering corn in the same competition as you each year?” the reporter asked.

“Aren't you worried that their corn will win instead?”

“Well, sir,” said the farmer, “it's not only the seeds — it's how you grow the corn. When it's windy, the ⁶pollen from the corn plant is picked up by the wind, and it flies out over all the nearby fields. If my neighbors grow corn that isn't as good as mine, their pollen will mix with my plants, and my ⁷quality will go down, too. If I want to grow good corn, I have to help my neighbors grow good corn.”

The explanation made the reporter understand the ⁸connectedness of ⁹living things — how the conditions in one field could ¹⁰touch all the fields around it.

He realized that this was not only true in farming. If you hope to live in happiness, you will be more successful if you also help your neighbors to live in happiness. If you don't, ¹¹it won't be long before the unhappiness around you begins to affect you, too. After all, the value of one life is ¹²measured by the lives it touches.

266words

The point of this story

This story shows us the importance of sharing. If you know someone who is usually happy and friendly, it's likely that that person is also someone who is good at sharing. People who try to keep their good fortune to themselves often spend their time ¹³worryingly ¹⁴guarding what they have, and have less time to relax and make friends.

かつて、ネブラスカに素晴らしいとうもろこしを育てる農場主がいました。毎年彼は自分のとうもろこしを州の品評会に出し、ほぼ毎回最優秀賞を受賞していました。

ある年、新聞記者がその農場主にインタビューをし、彼のとうもろこしの育て方について面白い事実を発見しました。記者は、その農場主が近隣の人たちに自分の種とうもろこしを分けてあげているということを知ったのです。

「近隣の農家も毎年同じ品評会にとうもろこしを出しているのに、なぜ彼らにあなたの最高の種とうもろこしを分けてあげる余裕があるのですか？」と記者は尋ねました。

「あなたではなく彼らのとうもろこしが優勝したら、と心配にならないんですか？」

「えーとですね」とその農場主は言いました。「種だけの問題ではないんです —— とうもろこしの育て方が大事なんですよ。風の強い日には、とうもろこしの花粉が風に乗って近くの畑全部に飛んで行きます。もし近所の人たちがうちのほど良くないとうもろこしを栽培していたら、その花粉はうちのとうもろこしと混ざり、うちのとうもろこしの質も下がってしまいます。良いとうもろこしを育てたいなら、近隣の農家も良いとうもろこしを育てられるよう手助けしなくてはなりません」

その説明で記者は生命のつながり —— つまりある畑の状態がいかに周りの畑すべてに影響するのか —— ということを理解しました。

このことは農業だけに当てはまるものではないと彼は気が付きました。もし幸せに暮らしたいと願うなら、自分だけでなく周りの人たちも幸せに暮らせるよう手助けすれば、自分もより幸せになれるのです。もしそうしなければ、ほどなく周りの不幸があなた自身にも影響を及ぼし始めるでしょう。結局のところ、一人の人生の価値は、それが関わった人生によって評価されるのです。

このストーリーのポイント

この話は私たちに共有することの大切さについて教えてくれます。もしあなたの知り合いにいつも幸せそうで優しい人がいたら、おそらくその人は共有するのが上手な人でしょう。幸運を一人占めしようとする人は、自分が持っているものを守らなければと気をもんで過ごし、くつろいだり友人を作ったりすることに費やす時間があまりないことが多いのです。

¹ state fair : 州の農産物品評会
² blue ribbon prize : 最優秀賞、特選
³ learn : ...を知る
⁴ seed corn : 種とうもろこし
⁵ How can you afford to ... ? : どうして...する余裕があるのか？
⁶ pollen : 花粉

- *7 quality : 質
- *8 connectedness : 連結、つながり
- *9 living things : 生きとし生けるもの、生命体
- *10 touch : ...に影響を与える
- *11 it won't be long before ... : ほどなく...だろう
- *12 measure : ...を評価する、査定する
- *13 worryingly : 心配なほどに
- *14 guard : ...を守る、...を見張る

Thanks for Your Time

君の時間をありがとう



人との絆・ふれあいの大切さ

ある男性の元に、幼いころにともお世話になった近所のおじさんが亡くなったとの知らせがあった。おじさんとは疎遠になっていたものの、男性はお葬式に参加することに。式の後、男性がおじさんの家に久々に足を踏み入ると……。



DL 18_Thanks for Your Time

It had been some time since Jack had seen the old man. College, ²¹girls, career and life itself ²²got in the way. Jack moved ²³across the country following his dreams. He had ²⁴launched an ²⁵architectural design office the previous year, and in the ²⁶rush of his busy life, he had little time to think about the past and often no time to spend with his wife and son. He was busy ²⁷working on his future.

Over the phone, his mother told him, “Mr. Belser died last night. The funeral is Wednesday.”
“It’s been so long since I thought of him. I thought he must have died years ago,” Jack said.
“Well, he didn’t forget you,” Mom told him. “Every time I saw him he’d asked how you were doing. He’d tell me about all the days you spent over ‘his side of the fence’ ²⁸as he put it,”
Memories ²⁹flashed through Jack’s mind as he remembered his childhood days. “He’s the one who taught me ³⁰carpentry,” he said. “I wouldn’t be in this business ³¹if it weren’t for him. He spent a lot of time teaching me things he thought were important …”
“You know, Jack, after your father died, Mr. Belser ³²stepped in to make sure you had a man’s influence in your life,” she said.
“Mom, I’ll be there for the funeral,” Jack said.
³³As busy as Jack was, he ³⁴kept his word. Mr. Belser’s funeral was small and ³⁵uneventful. He had no children of his own, and most of his relatives had passed away.

The night before Jack had to return home, he and his Mom stopped by to see the old house next door one more time.
Stepping into the house, Jack felt like he was ³⁶stepping back in time. The house was exactly as he remembered, and every step held memories. Every picture, every piece of furniture … Jack stopped suddenly.
“What’s wrong, Jack?” his Mom asked.
“The box is gone,” he said.
“What box?” she asked.
“There was a small gold box that he kept locked on top of his desk. I must have asked him a thousand times what was inside. All he’d ever tell me was, ‘The thing I ³⁷value most,’” Jack said.
It was gone. Everything about the house was exactly how Jack remembered it, except for the box. He ³⁸figured someone from the Belser family had taken it.
Two weeks later, returning home from work, Jack discovered a note in his mailbox. “Signature required on a package. Please stop by the main post office within the next three days,” the note read.
The next day Jack ³⁹collected the package. It was old and looked like it had been mailed a hundred years ago, but the ⁴⁰return address ⁴¹caught his attention.
“Mr. Harold Belser,” it read.
Jack took the package out to his car and opened it. There inside was the gold box and an envelope. Jack’s hands shook as he read the note inside.
“Upon my death, please ⁴²forward this to Jack Bennett. It’s the thing I valued most in my life.” A small key was taped to the letter. His heart ⁴³racing, Jack opened the box. There inside he found a beautiful gold ⁴⁴pocket watch.
He carefully ⁴⁵unlatched its cover, on the inside of which were written these words: “Jack, Thanks for your time! — Harold Belser.”
“The thing he valued most was … my time.”

Jack held the watch for a few minutes, then called his office and cleared his appointments for the next two days. “Why?” his assistant, Janet, asked.
“I need to spend some time with my son,” he said. “Oh, by the way, Janet … thanks for your time!”

609words

The point of this story
There is a lot of loneliness in the world, and yet spending time with people is such a simple thing to do. We can see how ⁴⁶grateful the old man was for the time Jack spent with him. This story encourages us to think about who we might be neglecting.

ジャックが最後にその老人に会ってからしばらくたっていました。大学や女友達、仕事、それに日々の生活そのものが再会の妨げになっていました。ジャックは夢を追って全国に移り住みました。昨年は、建築設計事務所を立ち上げ、忙しく慌ただしい生活の中で、過ぎ去ったことについて考える時間はほとんどなく、妻や息子と過ごす時間を持つことさえままならない状態でした。彼は未来に向かって忙しく働いていたのです。

電話越しにジャックの母は告げました「ベルサーさんが昨晚亡くなったの。お葬式は水曜よ」

「ベルサーさんのことはすっかり忘れていたよ。もう何年も前に亡くなったと思っていた」とジャックは言いました。

「でも、ベルサーさんはあなたのことを忘れていなかったわよ」と母は息子に言いました。「会うといつも、あなたが元気が聞いてきたものよ。ベルサーさんが言うところの『フェンスの彼側で』あなたが過ごしたたくさんの日々について話してくれたわ」

ジャックは少年時代を思い出し、さまざまな思い出が頭をよぎりました。「大工仕事を教えてくれたのはベルサーさんなんだ」と言いました。「彼がいなかったらこの仕事にはついていなかったよ。ベルサーさんはたくさんの時間を費やして、大切だと思ったことを僕に教えてくれたんだ……」

「ええ、ジャック、あなたのお父さんが亡くなった後、ベルサーさんはあなたの人生に男性の影響があるようにとこかわってくれたのよ」

「母さん、お葬式に行くよ」とジャックは言いました。

ジャックは多忙にもかかわらず、約束を守りました。ベルサーさんのお葬式はこじんまりとした、いたって普通のものでした。彼には子どもがいませんでしたし、親戚のほとんどはすでに亡くなっていました。

ジャックは自宅に戻らなくてはならない日の前夜、母と一緒に隣にあるその家を最後にもう一度だけ見ようと立ち寄りました。

その家に足を踏み入れた時、ジャックは自分が過去に戻った気がしました。家は自分が覚えていたのとそっくりそのまま、一歩進むごとに思い出がよみがえりました。一つ一つの絵、一つ一つの家具……そしてジャックは突然立ち止まりました。

「どうしたの、ジャック？」と母は言いました。

「あの箱がない」と彼は言いました。

「どの箱？」と母は尋ねました。

「机の上にベルサーさんが鍵をかけて置いていた小さな金の箱があったんだ。中に何が入っているのか、僕はしつこいくらいに何度も尋ねたと思う。でもベルサーさんは『私が一番大切にしているものだよ』としか教えてくれなかった」とジャックは言いました。

その箱はもうそこにはありませんでした。その家のすべてはジャックが覚えていた通りでしたが、その箱だけが違いました。ジャックはベルサー家の誰かがそれを持って行ったのだと思いました。

2週間後、仕事から帰ったジャックは、郵便箱にお知らせが入っているのを見つけました。「この小包の受け取りにはサインが必要です。3日以内に本局にお立ち寄りください」とお知らせには書いてありました。

翌日、ジャックは荷物を受け取りに行きました。それは古びていて、まるで100年も前に送られたかのようにでしたが、差出人住所がジャックの目に留まりました。

そこには「ハロルド・ベルサー」と書いてありました。

ジャックはその小包を車まで持っていき、そこで開けました。中にはあの金の箱と一枚の封筒が入っていました。中の手紙を読むジャックの手は震えていました。

「私の死に際し、これをどうかジャック・ベネットに転送してください。これは私が人生でもっとも大切にしてきたものです」手紙には小さな鍵がテープで留めてありました。ジャックはドキドキしながらその箱を開けました。中に入っていたのは美しい金の懐中時計でした。

ジャックが注意深くふたの留め金を外すと、中にはこんな言葉が書いてありました。「ジャックへ 君の時間をありがとう！ —— ハロルド・ベルサーより」

「彼が最も大切にしていたものは……僕の時間だったんだ」

ジャックはその時計を数分間握りしめた後、事務所に電話をかけ翌日から2日分の予定をすべてキャンセルしました。「なぜですか？」とアシスタントのジャネットは尋ねました。

「息子と過ごす時間が必要なんだ」と彼は言いました。「あ、ところで、ジャネット……君の時間をありがとう！」

このストーリーのポイント

世の中には孤独があふれていますが、誰かと時間を過ごすというのは実に簡単なことです。ジャックと共に過ごした時間に老人がどれほど感謝していたかが分かります。この話は私たちに、自分がついなおざりにしているかもしれない人たちについて考えさせてくれます。

- *1 girls：女友達
- *2 get in the way：邪魔をする、妨げになる
- *3 across the country：国中に
- *4 launch：...を立ち上げる
- *5 architectural design office：建築設計事務所
- *6 rush：慌ただしさ
- *7 work on ...：...に取り組む
- *8 as he put it：彼が表現していたように、彼が言っていたように
- *9 flash through ...：...をよぎる、ぱっと浮かぶ
- *10 carpentry：大工仕事
- *11 if it weren't for ...：もし...がいなければ
- *12 step in：介入する
- *13 as ~ as ... was：...は～にもかかわらず
- *14 keep one's word：約束を守る
- *15 uneventful：普通の、静かな
- *16 step back in time：少し前の時代に戻る
- *17 value：...を大切にする
- *18 figure：...と思う、判断する
- *19 collect：...を回収する
- *20 return address：差出人住所
- *21 catch someone's attention：...の注意を引く、目に留まる
- *22 forward：...を転送する、...を送る
- *23 race：（心臓が）高鳴る、ドキドキする
- *24 pocket watch：懐中時計
- *25 unlatch：留め金をはずす
- *26 grateful：感謝する

Subway Hero

地下鉄のヒーロー



ニューヨークの地下鉄で電車を待っていた若い大学生が、けいれんを起こして線路に転落してしまった。近くにいた男性は、大学生を助けるためにためらうことなく線路に飛び降りた。電車はごう音をとどかせながら、二人に迫ってくる……。



DL 19 Subway Hero

It was a normal January afternoon in New York for Wesley Autry. Wesley had just picked up his two daughters, aged 4 and 6, and was taking them home before heading to work himself.

As the three of them waited for the subway train to arrive, a young college student standing near the tracks suddenly began to shake, then he fell to the floor. Wesley and two other women tried to help the young man, but after a few moments the student seemed to recover. Shakily, he stood up, then suddenly fell over backward — right onto the train tracks.

Knowing the train was coming soon, Wesley acted quickly. He asked one of the women to watch his daughters, and jumped down onto the tracks. Wesley had hoped to lift the student back onto the platform, but the man was confused and weak.

Then, Wesley felt the rush of air and he heard the sound of a train. Looking up, he saw the bright lights coming quickly toward them. He was out of time.

Wesley did the only thing he could do. Quickly, he pushed the student into the low space between the tracks, and then lay on top of him. Wesley held the student's arms and legs down so he could not move, and said, "Sir, please don't move! If you move, one of us is going to die!"

Unable to stop, the train ran right over top of the two men, its brakes making a terrible noise. People on the platform shut their eyes in horror. When the cars finally came to a stop, there was silence. Then, a voice came up from beneath the train: "We're OK down here!"

The crowd on the subway platform burst into cheers. "I've got two daughters up there," continued Wesley. "Let them know their daddy's OK!"

In the days and weeks to come, Wesley was showered with praise. Donald Trump offered Wesley a check for \$10,000; Wesley's family was given free rides for a year on the subway, and a one-week trip to Disney World; and the school that the young student had been attending offered to teach Wesley's daughters for free.

But on that day — after dusting himself off and seeing the young man safely in the care of hospital staff — Wesley simply headed off to work. He was happy to have done the right thing.

395words

The point of this story
This story is based on a true event. In 2007, Wesley Autry did really save a young man on the subway. It shows that we do not need money or special treatment to make us feel happy. The important thing is not how much praise or reward we get, but to simply do what we think is the right thing. That should be enough.

それはウェズリー・オートリーにとっていつもと変わらない一月の午後でした。ウェズリーは4歳と6歳の娘を迎えに行った後、仕事に向かう前に子どもたちを家に連れて帰るところでした。

地下鉄の電車が来るのを三人が待っていると、線路のそばに立っていた若い大学生が突然震えだし、床に倒れました。ウェズリーとほかの二人の女性がその若者を助けようとしたのですが、その学生はすぐに回復したように見えました。彼はよろよろと立ち上がり、そして突然後ろに倒れました —— 線路の真上に。

電車が間もなく来ることを知り、ウェズリーは素早く行動しました。その女性の一人に自分の娘たちを見ていてくれるよう頼み、線路に飛び降りました。ウェズリーはその学生を持ち上げてプラットフォームに戻そうと思っていましたが、その男性は混乱して力もなくなっていました。

その時、ウェズリーは突風を感じ、電車の音を聞きました。顔を上げると、まぶしい光が彼らに向かって突進していました。時間切れでした。ウェズリーは自分にできる唯一のことをしました。素早く学生を線路の間の低いスペースに押し込み、その上に自分が横たわりました。ウェズリーは学生が動かないよう腕と足を押さえ、言いました。「どうか動かないで！ 動いたら、私たちのどちらかが死にます！」

電車は止まることができず、ものすごいブレーキ音を立てながら二人の男性の真上を通って行きました。プラットフォームにいた人々は恐怖で目を閉じました。車両がやっと止まった時、沈黙がありました。その後、電車の下から声が聞こえました。「こっちは二人とも無事です！」

地下鉄のプラットフォームにいた人々はどっと歓声を上げました。「娘が二人、そこにいるんです」とウェズリーは続けました。「彼女たちにパパは無事だと伝えてください！」

それから何日も何週間もの間、ウェズリーは称賛を浴びました。ドナルド・トランプはウェズリーに一万ドルの小切手を提示しました。ウェズリーの家族は一年間地下鉄に無料で乗れることになり、一週間のディズニーワールドへの旅行をプレゼントされました。またあの若者が通っていた学校はウェズリーの娘たちに無償で教育を与えると申し出ました。

しかし、あの日 —— 自分の体についたほりを払い、若い学生が病院のスタッフに無事保護されるのを見届けた後 —— ウェズリーはただ仕事に向かいました。彼は自分が正しい行いをしたことに晴れ晴れとした気持ちでした。

このストーリーのポイント

このストーリーは、実話に基づいています。2007年に、ウェズリー・オートリーは本当に地下鉄で若い男性を助けました。この話は私たちに、幸せな気持ちになるにはお金や特別待遇は必要ないことを教えてくれます。重要なのは、どんな称賛や報酬を受けるのではなく、自分が正しいと信じる行いをするかどうかということなのです。それで十分幸せを感じられるのです。

*1 track: 線路

*2 recover : 回復する

*3 shakily: 震えて、よろよろと

*4 backward : 後方へ

*5 confused : 混乱した

*6 rush: ほとばしり、勢いよく流れること

*7 in horror : 恐怖で

***8 burst into ...** : 突然...になる、どっと...する

*9 cheer: 喝采、歡聲

*10 be showered with praise : 称賛を浴びる

*11 Donald Trump: ドナルド・トランプ (アメリカの実業家。ニューヨークにあるトランプタワーや多くのホテル・ビルの所有者)

*12 in the care of ... : ...の世話になって、保護されて

*13 head off to ... : ...に向かう

*14 treatment: 待遇、扱い

The Story of Kyle

カイルの話



友情と思いやり

ある男子高校生が下校の途中、転校生のカイルがいじめられているのを目撃した。たたき落とされた教科書や眼鏡を拾うのを手伝ったその日をきっかけに、二人は親友となる。月日はたち卒業式を迎えたその日ある真実が明らかに……。



DL 20_The Story of Kyle

One Friday, when I was walking home from high school, I saw the new kid, Kyle. It looked like he was carrying all of his books. I thought to myself, “Why would anyone take home all their books on a Friday? He must be a real nerd.” I went back to thinking about my own weekend plans: football with my friends, then later a party.

As I walked on, I saw a bunch of kids running toward Kyle. They ran into him, knocking the books out of his arms and tripping him so he landed in the dirt. His glasses went flying, and I saw them land in the grass about 10 feet away. He looked up so sadly, almost crying.

So I went over and helped him pick up his books, and handed him his glasses. “Those guys are so stupid,” I told him. Kyle started to smile and said, “Hey thanks!” I could see I’d really cheered him up. As it turned out, Kyle had only moved to the area a few weeks earlier, but those guys had done the same thing to him nearly every day. “But they won’t be doing it again!” he said angrily. “Forget them Kyle,” I said, and invited him to play football on Saturday with me and my friends. He said yes.

It was a great weekend with Kyle and my friends, and the more we got to know him, the more we all liked him. Monday morning came, and there was Kyle with all his books again. “Sorry, you didn’t get much time to look at all those books,” I joked. He just laughed and handed me half of them to carry.

Kyle and I became best friends, and over the next four years although he never took all his books home on weekends, he did find plenty of time to study. Now that we were seniors, he was planning to be a doctor, while I was going to study for business on a football scholarship. A lot of things had changed during our time at high school, but especially for Kyle. Each year, one student is chosen by the teachers to make a speech at the high school leaving ceremony. This year they had chosen Kyle.

As he started his speech, he cleared his throat, and began, “This is a time of year for thanking all those who helped us make it through high school — our parents, our teachers, our sisters and brothers, but mostly our friends. I am here to tell all of you that being a friend to someone is the best gift you can give them. I am going to tell you a story.”

I could not believe my ears as Kyle began to tell everyone the story of the day we first met. He had been planning to kill himself that weekend! He talked of how he had taken all the books from his locker so his mom wouldn’t have to do it later. Then, once more, those guys had attacked him. “But, I was saved. My friend saved me.”

I heard the gasp go through the crowd as this ordinary, yet now popular, boy told us all about his weakest moment. “If you remember one thing that I say,” Kyle continued, “remember that we all have the power to change people’s lives. On that unhappy day, my friend could have kept walking but he chose to help me. And that changed everything. We all have the power to make other people happy or sad, not just for a minute but for a lifetime.”

598words

The point of this story

Small acts of kindness can have great consequences. By simply being kind to others in our daily lives, we can make the world a better place.

ある金曜日、高校から歩いて帰宅していると、カイルという転校生を見掛けました。彼は自分の教科書を全部運んでいるようでした。私は心の中で、「金曜日に教科書を全部持って帰るやつがどこにいる？ 本当にガリ勉強郎だな」と思いました。そして私は週末の予定——友達とのフットボールや、その後のパーティー——についてまた考え始めました。

私が歩き続けていると、たくさんの高校生がカイルに向かって走って行くのを見えました。彼らはカイルにぶつかっていき、彼が腕に抱えていた本を全部たたき落とし、足を引っ掛けて地面に転ばせました。カイルの眼鏡は飛んでいき、10フィートほど先の草の上に落ちました。彼が顔を上げたとき、その表情は悲しげで今にも泣きそうでした。

そこで私は彼の方に行って、本を拾うのを手伝い、眼鏡を手渡しました。「あいつら本当にばかだよ」と私はカイルに言いました。彼は笑顔になり、「うん、ありがとう！」と言いました。私は自分の行動が彼を本当に元気づけたことが分かりました。後で知ったことですが、カイルがその地域に引っ越してきてから、まだほんの数週間しかたっていませんでしたが、あの少年たちはカイルにほぼ毎日同じことをしていました。「でももう二度とできないぞ！」と彼は怒って言いました。私は「あいつらのことは忘れるんだ、カイル」と言って、土曜日に友達とフットボールをするから一緒に来ないかと誘いました。彼は行くと言いました。

その週末はカイルや友達ととても楽しく過ごしました。彼のことを知れば知るほど、私や友人は皆彼のことがもっと好きになりました。月曜の朝になり、また教科書を全部運んでいるカイルを見掛けました。「ごめんな、こんなにたくさんの本を読む時間なかつただろう」と私は冗談を言いました。彼はただ笑って、運ぶのを手伝うよう私に半分の本を渡しました。

カイルと私は親友になり、それから4年の間、彼が全部の教科書を週末に持って帰ることは二度となかったものの、勉強する時間は十分に見つけていました。4年生になると彼は医者を目指し、私はフットボールの奨学金がもらえるところでビジネスを学ぼうとしていました。高校生活の中でいろいろなことが変わりましたが、特にカイルは著しい変化を遂げました。毎年、一人の生徒が先生方に選ばれて卒業式でスピーチをするのですが、今年はカイルが選ばれました。

スピーチを始める時、彼はせき払いをし、そして話し始めました。「今は一年の中でも、高校生活を送る上で世話になったすべての人に感謝をする時期です——

両親、先生方、兄弟姉妹、しかし中でも友人に感謝をしたいと思います。今日ここにいる皆さんに、誰かの友人でいることはあなたが与えられる最高の贈り物だということをお伝えしたいと思います。あるお話をさせてください」

カイルが自分と最初に会った日のことをみんなに話し始めた時、私は耳を疑いました。彼はあの週末、自殺しようとしていたのです！ 後で母親の手を煩わせないよう、彼はロッカーからすべての教科書を持ち帰ったことを話しました。そして再び、あの少年たちが彼をいじめてきたのです。「しかし私は救われました。友人が救ってくれたのです」

この普通の、しかし今では人気者となった少年が自分の一番弱かった瞬間について話した時、集まっていた人たちが息をのむ音が聞こえました。「もし一つ覚えていてくださるなら」とカイルは続けました。「私たちには皆、ほかの人の人生を変える力があるということを覚えていてください。あの悲しい日、私の友人はそのまま通り過ぎることもできたでしょう、しかし彼は私を助けることを選んでくれました。そして、そのことによってすべてが変わりました。われわれは他人を幸せにも悲しくもさせる力があるのです、たった一瞬だけでなく、一生の間」

このストーリーのポイント

小さな親切が大きな結果をもたらすことがあります。毎日の生活の中で他人に親切にするというシンプルな行為によって、われわれは世界をより良い場所にすることができるのです。

- *1 think to myself：ひそかに思う
- *2 nerd：ガリ勉屋、おたく、いけすかないやつ
- *3 a bunch of ...：たくさんの...、...の一团
- *4 run into ...：...にぶつかる
- *5 trip：...をつまずかせる、転ばせる
- *6 land：落ちる、着地する
- *7 in the dirt：地面に、土に
- *8 as it turned out：後で分かったことだが
- *9 senior：（大学・高校の）最上級生。米国の4年制高校／大学の4年生のこと。
- *10 clear one's throat：せき払いをする
- *11 make it through ...：...を何とかやる、やり遂げる
- *12 kill oneself：自殺する
- *13 gasp：あえぎ、はっと息をのむこと
- *14 ordinary：普通の
- *15 consequence：結果、影響

Grameen Bank

グラミン銀行



社会貢献

貧困に苦しむ人々へ銀行サービスを提供するべく、1983年に設立されたグラミン銀行。功績を称えられた創始者のムハマド・ユヌスと銀行は、2006年にノーベル平和賞を受賞した。グラミン銀行は、どんな仕組みで貧しい人々を救っているのだろうか。



DL 21_Grameen Bank

In 1974, serious flooding in Bangladesh caused a terrible famine. Throughout Bangladesh, an estimated one million people starved to death over the next few years. During the famine, a concerned young professor at Chittagong University, Muhammad Yunus, was upset that all he could do to help society was teach economics. He wanted to do more to help his fellow countrymen and women. He wanted to put away the economic theories and textbooks and find out about the real lives of the poor of Bangladesh. With this in mind, he took his students on a field trip to the local village of Jobra. In Jobra, the professor and his students met a woman named Sophia who made small bamboo seats for a living. They were shocked to discover that she only made 2 cents a day from her work. Most of her money went into paying back high-interest loans that she used to buy the raw materials she needed. Their research in Jobra revealed many more poor people living just like Sophia.

Traditional banks would not lend money to these poor people because they did not trust the poor to pay them back. So, villagers such as Sophia had to borrow money from local dealers, who charged awfully high interest rates. None of the villagers could make enough money to escape their poverty because they were all having to pay back high-interest loans.

Yunus saw that if these people could borrow money at a more reasonable rate, it would help them greatly. So he lent 42 poor women the \$27 he had with him to buy raw materials to make their bamboo seats, etc. Crucially he trusted these penniless women to pay him back — if they didn't, there would be nothing he could do. Yunus's lower repayment rate allowed the women to make enough to live on and to make a profit. He continued his banking system for the poor based purely on trust, and it soon became successful in several villages. So in 1983, Yunus decided to start his own bank, Grameen Bank, with the single purpose of loaning money to the “poorest of the poor.” The word “gram” means village in Bengali, reflecting the bank's origins.

Grameen Bank has a unique system. To get a loan, all you need to show is that you are poor and you have the desire to work hard. Then, five of you make a group and each of you receives a small individual loan. People who borrow from the bank repay the trust they are given by repaying their loans in record numbers.

If one of the group cannot repay their loan, the rest of the group will suffer. This social pressure encourages the members to pay back on time. However, the rest of the group do not have to repay an unpaid loan — Grameen Bank accepts it as a loss. By trusting these people with their tiny loans, Yunus allowed them to help themselves. It is an interesting fact that about 97 percent of Grameen borrowers are women. Yunus believes that women living in poverty use the money more directly for their families than men. Not only do they repay their loans, but they also clothe, educate and feed their children with their profits.

Over the last few years, the greed and mistakes of traditional banks have caused great problems in the world economy. At the same time, Grameen Bank has continued to make life a little better for the poor of the world. The contrast between these banks and Grameen Bank is obvious: they work to make money; Grameen works to help the poor.

Grameen Bank has so far loaned about \$6.4 billion to 7.4 million families, and now many financial institutions around the world have copied Muhammad Yunus's simple model. It is worth remembering that the poor are not poor because they are lazy. They are no different from the rich. They just happen to have been born into different families. In 2006, the great work done by Yunus and the bank itself was recognized, and they were awarded the Nobel Peace Prize.

683words

The point of this story

This story demonstrates the power of trust. Muhammad Yunus and his Grameen Bank are a shining example to everyone. They show us that making money is not the most important goal, even for a bank!

1974年、バングラデシュで起きた大洪水が深刻な飢饉を引き起こしました。以後数年の間に、バングラデシュ全土で推定百万人の人が餓死しました。飢饉の際、これを心配していたチッタゴン大学のまだ若い教授ムハマド・ユヌスは、社会を助けるために自分ができることは経済を教えることくらいだという事実 ira立っていました。自分の国の人々を助けるためにもっと何かしたいと思いました。彼は経済理論や教科書などは捨てて、バングラデシュの貧しい人々の本当の生活をもっと知りたいと思いました。このことを胸に、彼は自分が教える学生を地元のジョブラという村まで校外学習に連れて行きました。教授と学生はジョブラで小さな竹のごさを作って生計を立てているソフィアという女性に出会いました。彼女が一日の労働で稼ぐお金がたった2セントであることを知って、彼らはショックを受けました。彼女のお金のほとんどは、必要な原材料を買うために借りた高金利ローンの返済に充てられていました。彼らがジョブラで行った調査の結果、ソフィアのような貧しい暮らしをしている人がたくさんいることが明らかになりました。従来の銀行は、こうした貧しい人たちがきちんと返済すると信用していなかったため、彼らにお金を貸すことはしませんでした。そのため、ソフィアのような村人たちは非常に高い金利を課す地元の貸金業者から借りなければなりませんでした。村人たちは皆、この高金利融資の返済をしなければならず、貧困を脱するのに十分なお金を稼ぐことができる人は一人もいませんでした。

どんどん読める 明日への活力がわいてくる

英語で元気が出る ちょっといい話（電子書籍版）

発行日：2012年7月1日（Ver.1.0）

2014年5月1日（Ver.1.1）

企画・編集：英語出版編集部 ちょっといい話製作委員会

収録英文リサーチ、翻訳・語注作成：原田美穂

英文リライト・コメント執筆、英文校正：Peter Branscombe、Owen Schaefer

表紙デザイン：岡優太郎（synchro design tokyo）

イラスト：泰間敬視

ナレーション：Bianca Allen、Howard Colefield、Andree Dufleit、Chris Koprowski

録音・編集：嶋津行夫（YeastSounds）

電子書籍制作：株式会社ジェイ エスキューブ

発行者：平本照磨

発行所：株式会社アルク

〒168-8611 東京都杉並区永福2-54-12

Email：csss@alc.co.jp

Website：http://www.alc.co.jp/

- ・本書は『英語で元気が出る ちょっといい話』（2012年発行）の電子書籍版です。
- ・本書の全部または一部の無断転載を禁じます。著作権法上で認められた場合を除いて、本書からのコピーを禁じます。

(C)2014 ALC PRESS INC. / Miho Harada / Takashi Taima

PC：9580029

ISBN：9784757417007

If you have any information concerning copyrights of these stories, please contact us.

